

菊水町文化財調査報告 第16集

おとえた
乙城跡・江田城跡

— 菊水町所在の中世城跡 —

2 0 0 3 年

くま もとけんたま な ぐん きくすいまち
熊本県玉名郡菊水町教育委員会

菊水町文化財調査報告 第16集

おと
乙城跡・江田城跡
え
た

— 菊水町所在の中世城跡 —

2 0 0 3 年

くま もとけんたま な ぐん きくすいまち
熊本県玉名郡菊水町教育委員会

序 文

菊水町では、町史編纂事業の一環として、町内所在の中世城跡調査を実施していますが、これまで刊行された2冊の報告書に見るよう、着々と成果が上がっています事を、大層嬉しく思います。町内城跡は、総計17城を数えますが、これも、肥後の北域にあたる地域性によるものと解釈しています。領域境の筑後との小競り合いも数多かったのでしょう。そのために、多くの城郭を必要としたと思われます。

これらの城跡は、有事の際の戦いの場や、逃げ込みの場であり、普段にも、領民が集う精神的な寄り所でもありました。あらゆる意味で、地域のセンター的な役割を果たしたのです。この様に、城郭は、中世社会で大きなウエイトを占めました。しかし、その様な「兵(つわもの)どもが夢の跡」も、今日では、ほとんど忘れ去られて、その面影を知る山もありません。廃城後、藪の中で、何百年もの長い眠りについていたのです。

現在、個々の城跡に立ち入り、下草の伐採、測量調査、報告書作成という手順を踏んでいますが、その過程で、麓集落との結び付きや、各城跡に共通する縄張りが見い出される等の発見もありました。特に、今回は、有名な竹崎季長の『蒙古襲来絵詞』に登場する「ゑたの又太郎ひていゑ」に関連する江田城跡調査にも取り組む事ができました。江田氏は、南北朝時代に南朝方に属した武将で、我町の中世を語るに欠かせない人物です。この意味から、得られた縄張図は、江田氏研究に貴重な資料になるものと思われます。同時に、隣地の乙城跡とのセット関係も明らかになりました。

今後とも、調査を続行しますので、さらなる成果を期待するところです。最後になりましたが、教育委員会と共に、調査に取り組まれている関係各位へ厚くお礼を申し上げます。本報告書によって、郷土に対するさらなる理解が、深まります事を祈念いたします。

平成15年3月31日

菊水町教育長 相澤 紘一

目 次

第Ⅰ章 調査の概要 ······	1
第1節 調査の組織 ······	1
第2節 調査の進展 ······	1
第Ⅱ章 調査結果 ······	5
1. 乙城跡 ······	5
2. 江田城跡 ······	20
第Ⅲ章 まとめ ······	40
1. 乙城跡 ······	40
2. 江田城跡 ······	41
写真図版 ······	43

挿 図 目 次

第1図 菊水町中世城跡位置図（調査分）	第19図 江田城跡模式図①
第2図 乙城跡・江田城跡周辺地形図および字図	第20図 江田城跡模式図②
第3図 菊水町中世城跡位置図（全城）	第21図 V区画・表採遺物実測図
第4図 乙城跡位置図	第22図 江田城跡地籍図
第5図 乙城跡周辺地形図	第23図 江田城跡全体測量図およびグリッド設定
第6図 乙城跡模式図①	第24図 江田城跡測量図①
第7図 乙城跡模式図②	第25図 江田城跡測量図②
第8図 乙城跡模式図③	第26図 江田城跡測量図③
第9図 乙城跡模式図④	第27図 江田城跡測量図④
第10図 乙城跡地籍図	第28図 江田城跡測量図⑤
第11図 乙城跡全体測量図およびグリッド設定図	第29図 江田城跡測量図⑥
第12図 乙城跡測量図①	第30図 江田城跡測量図⑦
第13図 乙城跡測量図②	第31図 江田城跡測量図⑧
第14図 乙城跡測量図③	第32図 江田城跡測量図⑨
第15図 乙城跡測量図④	
第16図 乙城跡測量図⑤	
第17図 江田城跡位置図	
第18図 江田城跡周辺地形図	

写 真 図 版

乙城跡

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 図版 1 乙城跡の遠望 | 図版 10 括れ部⇒帶曲輪③ |
| 図版 2 宮地嶽神社（正面鳥居から） | 図版 11 帯曲輪③⇒Ⅰ郭北西側法面 |
| 図版 3 Ⅰ郭（南東区画） | 図版 12 帯曲輪③⇒小段② |
| 図版 4 Ⅰ郭⇒帶曲輪② | 図版 13 帯曲輪③⇒小段② |
| 図版 5 帯曲輪②⇒Ⅰ郭南側法面 | 図版 14 小段②⇒帶曲輪③北西側法面 |
| 図版 6 Ⅰ郭南東隅⇒小段⑤ | 図版 15 小段②⇒小段⑩ |
| 図版 7 Ⅰ郭西下の坂道⇒小段⑦ | 図版 16 小段②⇒小段⑨ |
| 図版 8 括れ部⇒小段⑦ | 図版 17 Ⅱ郭北東隅⇒小段⑩ |
| 図版 9 括れ部⇒宮地嶽神社 | 図版 18 小段⑩⇒小段⑨ |

江田城跡

- | | |
|---------------------------------|--|
| 図版 19 江田城跡の全景 | |
| 図版 20 Ⅰ郭に祀る祠〔しろさん〕 | |
| 図版 21 Ⅰ郭に祀る祠〔弁財天〕 | |
| 図版 22 Ⅰ郭東端⇒帶曲輪① | |
| 図版 23 Ⅰ郭東端⇒Ⅰ-G（北方向・丘頂ライン付け根） | |
| 図版 24 Ⅰ-G⇒北方向・丘頂ラインからⅠ郭の北東側法面 | |
| 図版 25 Ⅰ郭西端⇒Ⅰ-F-④（北西方向・丘頂ライン付け根） | |
| 図版 26 Ⅰ郭南端⇒帶曲輪④ | |
| 図版 27 帶曲輪⑤⇒Ⅰ-E-②（南西側丘頂ライン付け根） | |
| 図版 28 Ⅰ-E-③⇒南西側丘頂ライン（痩せ馬地形） | |
| 図版 29 帯曲輪①⇒Ⅰ郭北側法面 | |
| 図版 30 Ⅱ郭南西側⇒Ⅱ-⑫（帶曲輪） | |
| 図版 31 Ⅱ郭西縁⇒Ⅱ-⑩（西側帶曲輪） | |
| 図版 32 Ⅱ郭北西隅⇒Ⅱ-⑩（北側帶曲輪） | |
| 図版 33 Ⅲ郭⇒Ⅱ郭東側法面 | |
| 図版 34 Ⅲ-⑯（帶状の窪地） | |
| 図版 35 Ⅳ区画 | |
| 図版 36 Ⅴ区画（御神木） | |

例 言

1. 本書は、熊本県玉名郡菊水町教育委員会が、平成14年度に実施した中世城跡の測量調査の報告書である。
2. 測量調査を実施した城跡は「乙城跡」と「江田城跡」である。
3. 測量調査は、町史編纂委員の大田幸博氏（歴史公園鞠智城・温故創生館・分館長）が行った。
4. 本書の執筆は、大田氏を中心に、石工みゆきさん、溝口真由美さん、益永浩仁（菊水町教育委員会）が行った。
5. 製図は、石工さんと溝口さんが行った。
6. 本書の編集は、大田氏と溝口さんが行った。

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の組織

調査主体 菊水町教育委員会

調査責任者 相澤紘一（菊水町教育長）

調査者 大田幸博（歴史公園鞠智城・温故創生館・分館長） 益永浩介（菊水町教育課主査）

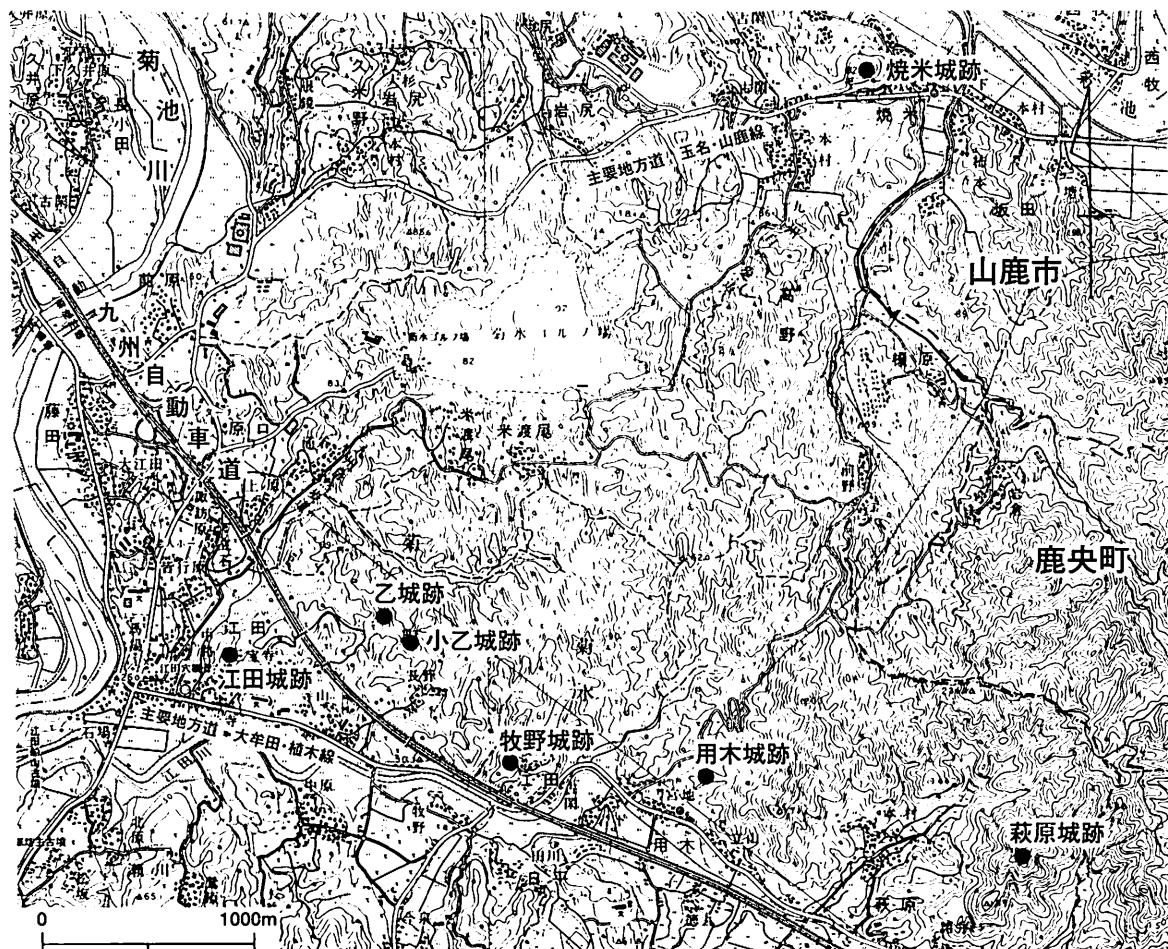
石工みゆき 溝口真由美

調査事務局 堤恒夫（菊水町教育課長） 坂口淑子（菊水町教育課主査）

測量補助 片岡靖臣 奥井 老

第2節 調査の進展

今回は、乙城跡と江田城跡を調査の対象とした。これらは、県道大牟田・植木線（主要地方道）の沿線・北側に所在する中世城跡群に含まれる二城跡である。この事により、これまでの調査分を含めると、東方面から西方面へ、萩原城跡～用木城跡～牧野城跡～小乙城跡～乙城跡～江田城跡の順に調査が進展したことになる。これに加え、初年度に、別ルートの県道玉名・山鹿線（主要地方道）の沿線・北側の焼米城跡を調査済みである。結果として、4ヶ年間で合計7城跡の調査が終了した。城跡の性格については、萩原城跡が唯一、大規模山城である外は、6城跡すべてが平山城の部類に入る。大方が、菊水町に卓越する低平な丘陵地を利用した城郭である。



第1図 菊水町中世城跡位置図（調査分）

第3節 城跡の概要

1. 乙城の概要とアクセス

当地に「乙城」の字名も残っており、地元の三宝寺地区では、城跡としての認識が強い。これは、主郭部分に小社殿の宮地嶽神社があることによる。今日、城跡と周辺地は、植林された杉や雑木に埋もれて、昼なお薄暗い感じがする。山道から枝分かれした短い坂道を登り切れば、かつて、轍が立てられた2本の石柱と、大正9年に建立された鳥居、そして小規模な境内と社殿が目に入る。戦前は、武運を祈った参拝者も多かったのである。石柱は、その名残りである。さらに、城跡一帯は、里山であった。しかし、戦後の時勢の変化や、九州縦貫自動車道建設で城跡と集落が、完全に切り離された事もあって、状況は一変した。杉の植林も、里山としての必然性が薄れることや、畠地の跡地利用に他ならない。社殿と境内に限り、地区の有志によって、月2回の清掃作業が実施されているものの、城跡一帯は、人里から、やや離れていることもあり、世間から隔絶した感がある。三宝寺地区からも、城跡の一部が望めるに過ぎない。

小社殿の右手には、氏子名が刻まれた記念碑(石碑)で「明治31年1月10日の御勧請」との銘もある。城跡は、ブーメラン状に弯曲した帶状の丘陵地を利用したもので、丘頂域が、広い平場となっている。明らかに、人の手が加わった削平地である。丘陵角隅からの派生箇所にも、張り出し区画の中平場がある。さらに、丘頂直下の斜面部には、小段が数多く造成されている。

城跡までの車によるアクセスは、次の通りである。江田で県道玉名・山鹿線の四差路を東に折れて、先に述べた県道大牟田・植木線を植木方面に東進する。ほどなくして、左手に肥後銀行菊水支店と村上建材店の並びがあり、建材店先から左折して町道に入る。この時、道標の大きな石柱が目印となる。町道は、直ぐに三差路となり、左手に農協、正面右手に銀河ステーション(役場跡地)がある。この三差路を右折し、宝光橋を渡ると、枝分かれした町道沿いに江光寺地区が展開する。地形的には、町道の左手に、比高差の余り無い帶状丘陵地が壁をなす所で、これを城地としたのが江田城跡である。江光寺地区公民館の向い側が、城跡の西端部分となる。

この状態を整理すれば、いずれも東西方向に軸を持つものとして、北端に江田城跡のある低丘陵地～裾部に家屋列～各庭先に畠地・町道～南側に家屋列と畠地・県道～家屋列・河岸段丘～江田川という並びになる。

この町道を進むと、右手に町立菊水中央小学校を見る三差路となる。さらに、ここを過ぎて、東進すると、左手に杉本信昭氏宅があるが、この直ぐ先から、南側の旧タオル工場方向へ町道が弯曲する。

乙城跡へは、杉本氏宅の東縁から左折して小道に入り、ここを進んで、直ぐに左へ折れる。これから先は、急な登り坂で、車一台が、やっと通れる山道である。周囲に雑木や竹がビッシリ茂っており、道は途中から、昼なお薄暗い情景を呈する。

坂道を登り切ると右手に、九州縦貫自動車道に架る陸橋(三宝寺橋)がある。乙城跡へは、この陸橋を渡る(江田城跡の搦め手へは、そのまま山道を直進する)。陸橋を過ぎると、小道は、いよいよ狭くなつて、左手が崖面となる。周囲は、荒れ地で、程無く、神社への登り口に到達する。道幅は、ここで、若干、広くなつてるので、車を停める(後述するが、このまま進めば、山道は、麓の三宝寺地区に繋がる。ただし、これから先は、車道ではない)。徒步で坂道を登っていくと、3分程で城跡の丘頂域に至る。入口箇所に鳥居があり、ここから先は、前述の通りである。

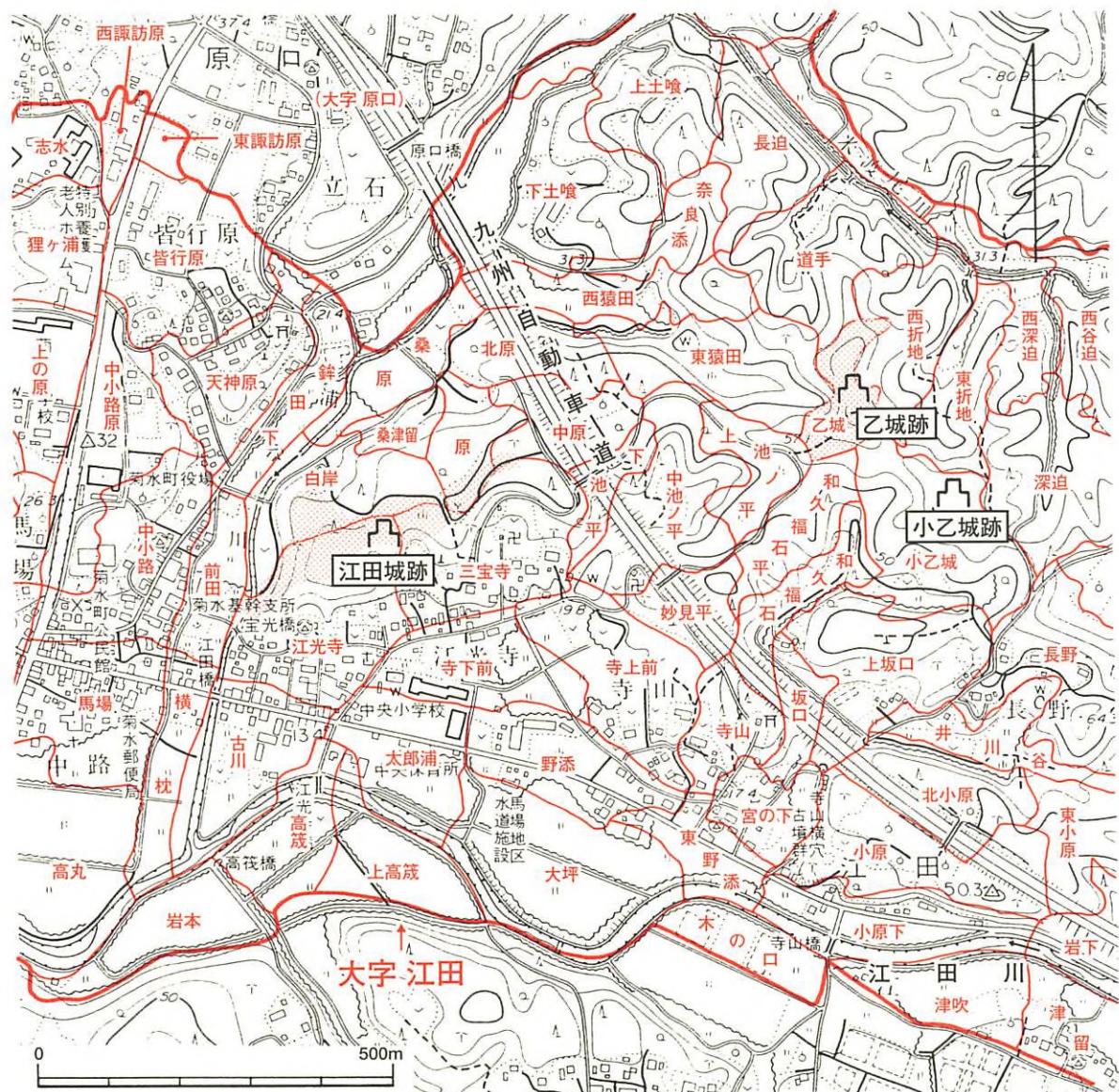
このルートは、車でのアクセス方法で、バイクや徒步でなら東回りのルートもある。これは、杉本氏宅を過ぎて、旧タオル工場方向から延びてきた町道の弯曲部分をやり過ごして、さらに東進する方法である。道は、弯曲部分から道幅を狭めて、三宝寺地区の南端を横断する格好となる。そして、高速道路の陸橋を渡り、西へカーブを描きながら進むと、先に述べた杉本氏宅からの山道と出会う。三宝寺地区の人々は、このルートが、正式な登城道ではないか(大手口ルート)との認識を持っている。そうなれば、先に述べた車道は、

搦め手ルートになる。

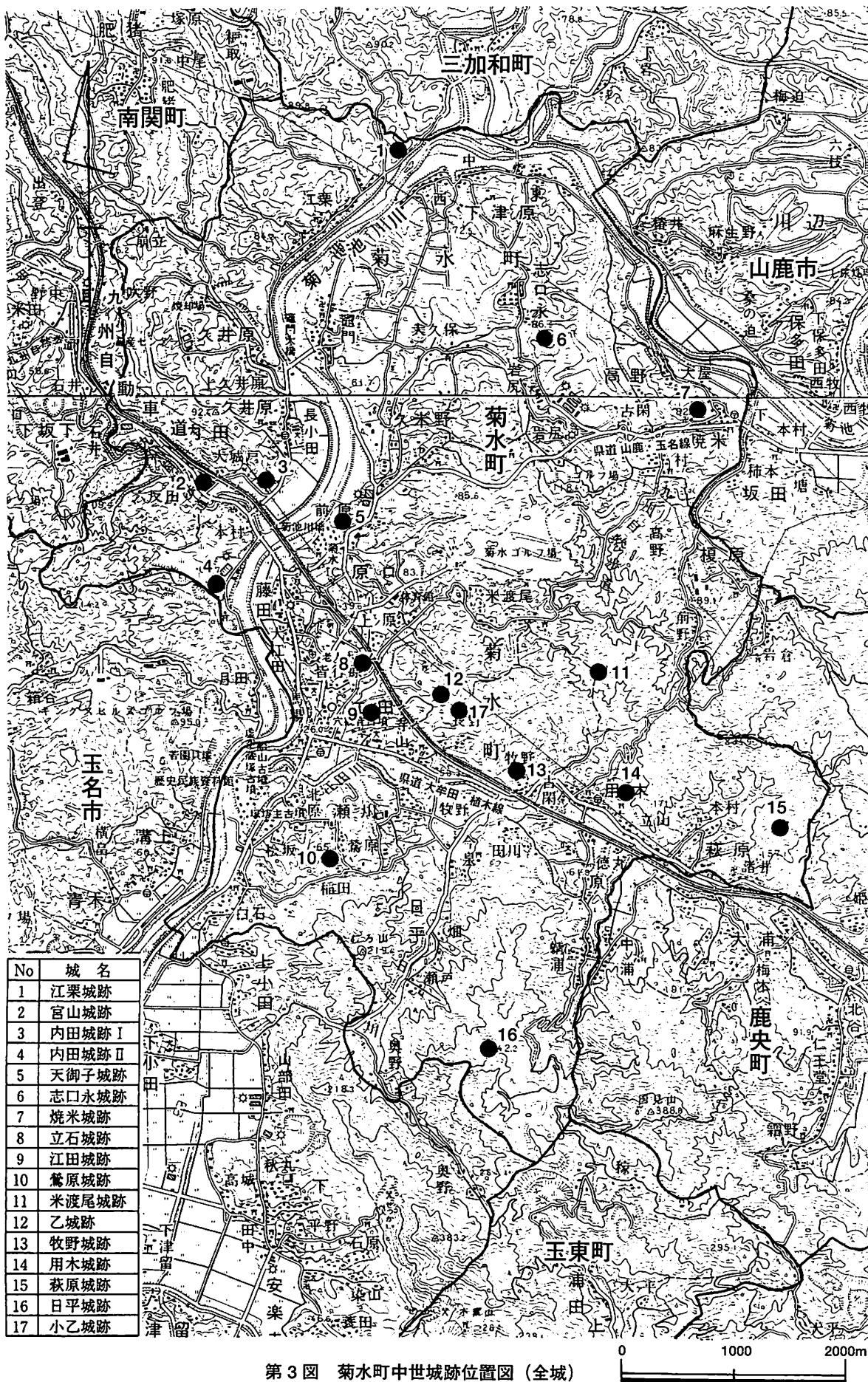
地図を見ると、先に調査した小乙城跡と、今回の乙城跡とは、隣り合っているために、関連城郭の様に受け取れる。しかし、一帯が荒れ地で、深谷を挟んで対峙しているために、現場では、その様に受け取れない。乙城跡は、集落から、やや離れている事から、大方、「詰めの城」の役割を担ったものと考えられる。

2. 江田城跡の概要とアクセス

江田城跡は、東西に長い丘頂域を利用しているので、町道から三通りのアクセスがある。城跡の西端から登るには、坂口一幸氏宅から左折して「お堂」を経由する。ここは、江光寺跡とされる所である（お堂は、かつて近くの道傍にあったが、町道拡幅工事の際に、現位置へ移された）。さらに、町立菊水中央小学校を右手に見る三差路手前からの進入口がある。入江昭徳氏宅から左折して、木村不可思氏宅の西縁を進む鍵型の小道である。城跡地を二分する谷部（自然地形に手を入れた堀切として活用したもの）に向かうもので、大手口ルートと見なされる。一方で、先に述べた九州縦貫自動車道の陸橋からのアクセスもある。搦め手ルートで、非常時の逃げ道を兼ねたものであろう。江田城跡は、集落と一体化した総構えの城跡と見なされる。



第2図 乙城跡・江田城跡周辺地形図および字図

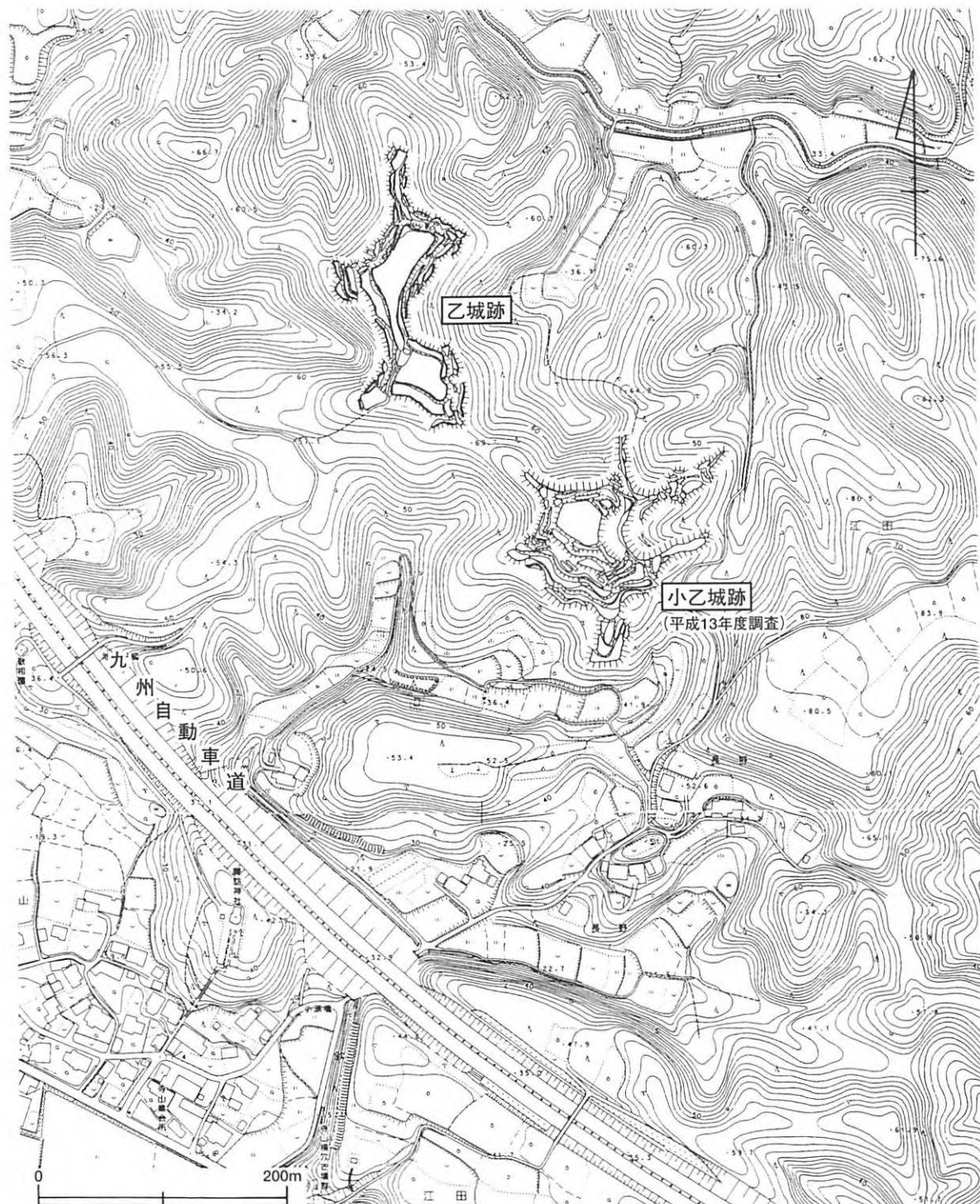


第3図 菊水町中世城跡位置図（全城）

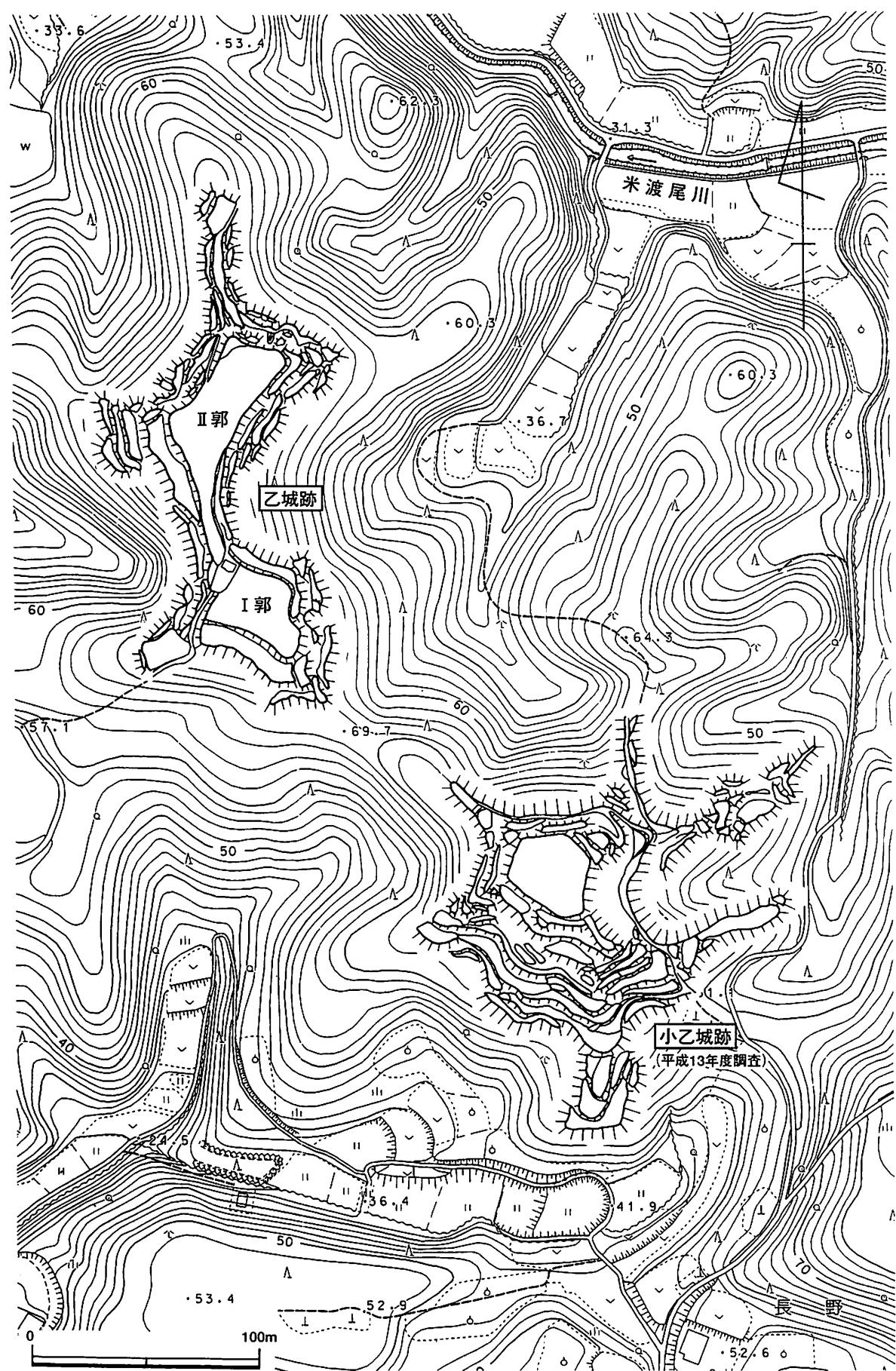
第Ⅱ章 調査の成果

1. 乙城跡 おと

城跡は、南北方向に主軸を持つ帶状地形を利用している。ただし、中途に大きな括れ部があるために、地形は、二分された格好になっている。丘頂域は、両郭が、南東側と北東側に弯曲する格好となっており、概して平坦地をなす。以下、縄張りを示す模式図中の記号に従って説明を行う。



第4図 乙城跡位置図



第5図 乙城跡周辺地形図

(1) I郭

基本的に、やや歪な方形をなし、乙城跡の主郭と見なされる。N60°W方向に主軸の向きがあり、長さは南縁43m、北縁36m。南北の幅は最大27m。中央の北寄りの地点が城跡の最高所で、標高83.43m。平場の中央箇所を83mの等高線が横断している。境内部分を除き、調査前は、かなりの荒れ地であった。

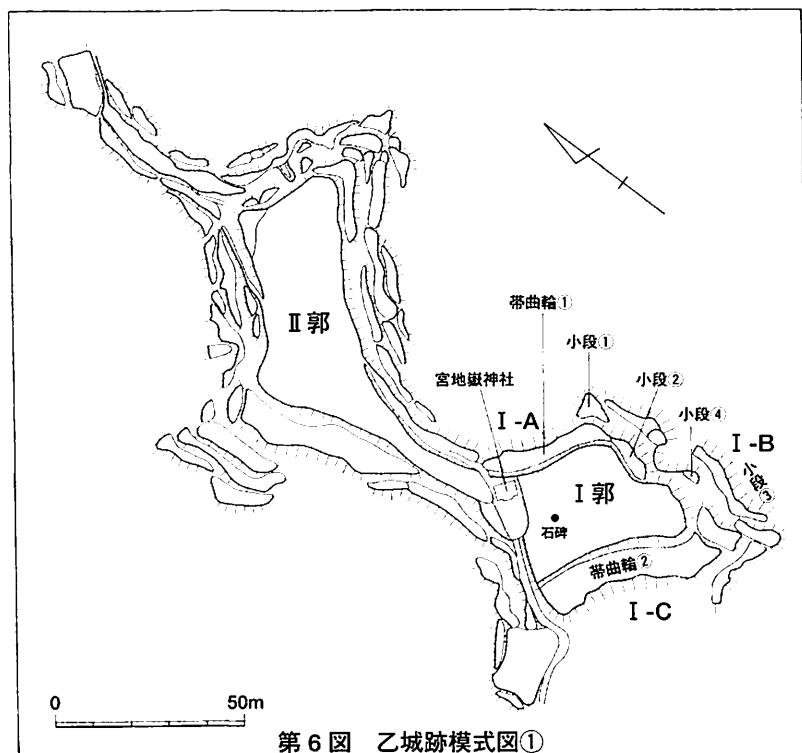
境内右手の石碑には「明治三十一年一月十日 御勅請」とあり、氏子が連名で刻まれている。宮地嶽神社の拝殿は、桁行6.0m×梁行4.0mの小規模建物。神棚に祭られた銅製の手鏡には「明治三十二年」の年号があり、これらの事から、明治30年代の初期に建立された拝殿と考えられる。それ以前については不明であるが、他の中世城跡の様に、江戸時代からこの地に「山の神」などが祭られていた可能性が高い。何がしかの神社勅請の呼び水が、あったはずである。拝殿の境内部分は長さ17m、幅8.0m。I郭四方の段落ち（I-A～D）には、帯曲輪と小段群が張り付く。さらに、南西隅下には、小平場（I-E）が造設されている。これらは、丘陵の角隅から下る派生部分を利用したものである。

《I-A》北斜面部に、帯曲輪と小段がある。帯曲輪①は、中央部の標高81.87m、I郭との比高差1.39m、長さ32m、幅3.6～6.0m。帯曲輪としては、やや幅が狭く、I郭の主軸方向に沿っている事から、犬走りの役目も果たした事が分かる。東端は1.0m幅に括れるが、途切れる事なく主郭の東側へ回り込んで、小段②に繋がる。法面は、直に削り落とされている。東端下には、隅丸三角形の小段①が付く。帯曲輪①との比高差3.29m、規定部の長さ9.0m、最大幅6.0m。これより、下位の斜面部は、急斜面となる。

《I-B》東斜面部に、小段群（4段）がある。標高82m～73mの範囲に、疎の状態に配置されている。I郭北東隅の小段②は、長さ14m、最大幅4.0m、I郭との比高差は0.84mに留まる。緩斜面部の削平地で、I郭の平場面積の拡大と、形状修正の役を果たす。最下位の小段③は、I郭との比高差9.54m。やや歪な犬走りで、全長28m、幅1.8～3.4m。小段④は、小規模な造りで隅丸の鈍角三角形をなし、基底部の長さ5.0m、幅2.0m、I郭との比高差6.23m。斜面部を上下移動する際の、足掛りステップと思われる。このような極小段は、近年の調査で、球磨郡あさぎり町の永里城跡から数多く発見されている（註1）。

《I-C》南直下の帯曲輪と小段。帯曲輪②は大規模造りで、長さ44m、幅7.0～11m、I郭の主軸方向に沿っており、標高80.11m、I郭との比高差3.0m。I郭の南側・緩斜面部を大きく削り取ったもので、法面も直の状態に削り落とされている。大土木工事によって、^{くわい}郭に該当する平場面積が確保されている。I郭の法面も、上壁の様相を呈して、かなりの威圧感がある。

町内の用木城跡にも類似の地形がある（註2）。町外では堅志田城跡（下益城郡中央町）や、棚底城跡（天草郡倉岳町）などに見られる。発掘調査によって、堅志田城跡からは、掘立



第6図 乙城跡模式図①

（註1～4）⇒ 42頁

柱建物跡や柱跡群が検出された（註3）。柵底城跡では、調査前から上塙が巡っていたが、二条の複合空堀も埋没していた（註4）。

東端下の小段⑤は、帯曲輪②との比高差1.2m、長さ13.4m、幅4.2～5.2m。帯曲輪②の延長部分であるが、地形の関係で、この範囲は、段下がりになったのであろう。小段⑥は、帯曲輪②の南東端下にある犬走りで、比高差4.46m。東西に主軸の向きがあり、長さ21m、幅1.2～3.6m。I-B部分の小段群との組み合わせにより、I郭の南東端から下る斜面部・角隅ラインを取り囲むことが出来る。

《I-D》西直下の小段列。全長51m、横位の方向に3段で構成されており、斜面部に取り付く有様がよく分かる。各小段は、南側から北側へ、1.25m、0.6mと高さを減じながら横並びとなる。真中の小段⑦は、標高79.16m、I郭との比高差4.07m、長さ26m、最大幅3.8m。斜面部は、中途から下位へかけて急勾配となるため、そのまま自然地形で残されている。

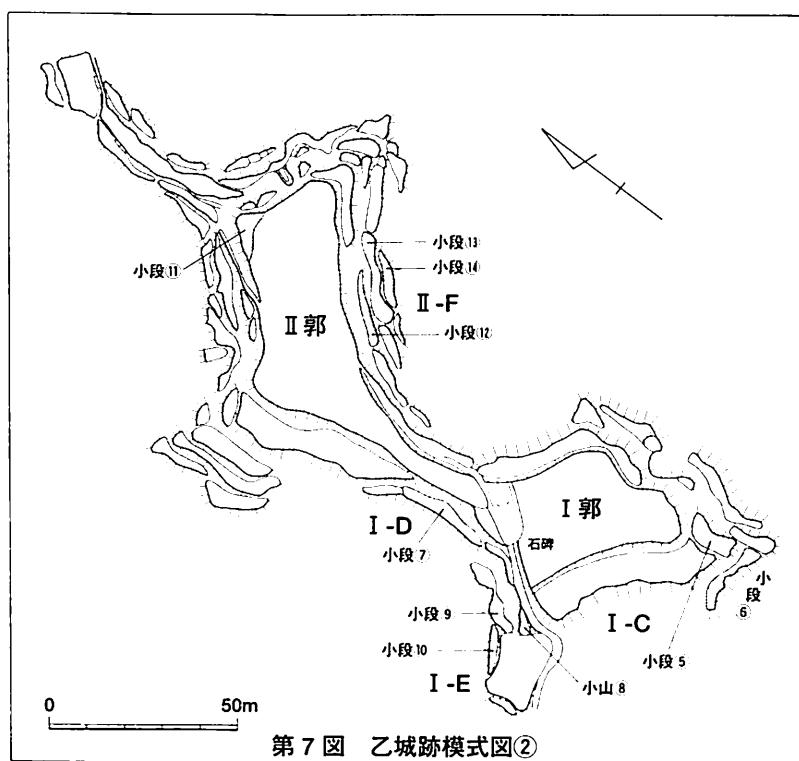
《I-E》I郭の南西隅下にある長方形状の平場で、標高75.51m、I郭との比高差7.23m。近世城の出丸に該当する。N64°E方向に主軸の向きがあり、長さ20m、幅12～14m。平場と丘陵の付け根部分には、高さ0.37mの小山⑧がある。坂道の脇にあって、銳角三角形をなし、基底部の長さ3.0m、幅8.0m。I-Eとの比高差2.85m。

北東隅からは、平場と同一レベルで、小段⑨が伸びている。長さ11.5m、幅4.0m。上段（比高差0.75m）には、別的小段が付く。これらは、広い意味で、I-D部分の小段群に含まれる。さらに、平場の北側と西側の直下には、それぞれに帶状小段を見る。小段⑩は、比高差1.74m、長さ14m、幅2.3m。

(2) II郭

基本的に長方形をなし、乙城跡の副郭と見なされる。N50°E方向に主軸の向きがあり、長さ67m、幅は中央部で22m。ただ広い平地で、最高所の標高は82.865m。両郭間に段差は無く、最高所の比高差も1.0m程度に収まる。中央部を82mの等高線が横断する。II郭の北西隅には、小段⑪に似た小段⑫がある。隅丸三角形で長さ13m、最大幅5.8m、II郭との比高差は、0.92mに留まる。これも、I郭の小段②と同様に、II郭の平場隅を押し広げるための造成で、やや歪なII郭・角隅の形状修正にも繋がっている。II郭四方の段落ち（II-F～I）にも、数多くの小段群が張り付く。

《II-F》II郭の東斜面部では、標高79～71mの範囲に計15段を数える。大方、帯状地形で、配列状態には、規則性がある。小段列を形成するのは、上位の標高77m～79mラインに4段、中位の標高75m～77mラインに3段、下位の標高73m～74mラインに2段である。それぞれが、南側から北側へ、高さを減じながら横並びとなる。上位の小段⑫は長さ20.6m、幅1.0m



第7図 乙城跡模式図(2)

～2.8m、中位の小段⑩は、多少、歪で、長さ25m、幅2.0～4.8m。下位の小段⑪は、長さ16m、幅1.0～2.8m。これらと、最下段の小段⑫が組み合わさって、最終的に、4段の小段列が形成されている。小段⑫は、隅丸の鈍角三角形で、標高71.60mに位置し、長さ11m、最大幅4.0m。

さらに、Ⅱ郭の北東端・角隅ラインには、6段の小段群がある。これも、標高80m～71mの範囲にあり、密な状態に配列されている。銳角三角形状に張り出した角隅を意識した造りである。防備が甘ければ、この方面から敵勢の進入を許すことになる。最上位の小段⑬は、凸型のブーメラン形をしており、Ⅱ郭の角隅を東から北へ巡る。東側の長さ22m、幅2.0m～3.0m、北側の長さ10m・幅2.5m。弯曲部分の最大幅は5.0m。中段からは、足掛かりステップの小段が混じる。小段⑭は、長さ5.0m、幅2.4m。

最下位の小段⑮は、これら小段群の要の位置にある。Ⅱ郭との比高差9.6m。歪な隅丸三角形で、基底部の長さ7.5m、幅3.5m～6.5m。

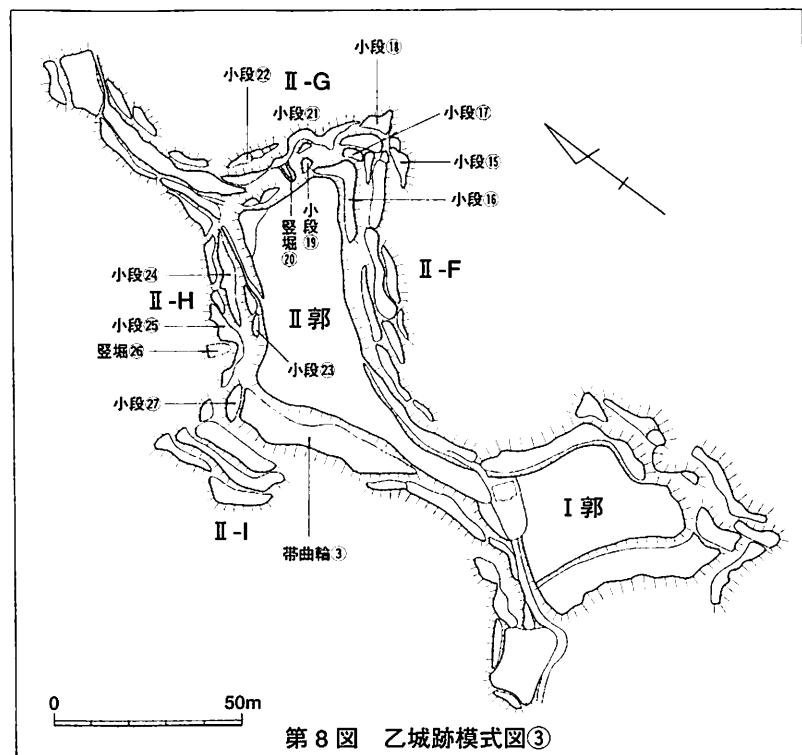
《Ⅱ-G》Ⅱ郭の北斜面部では、標高79～69mの範囲に、小段群と堅堀がある。Ⅱ郭直下には、足場掛けステップが横位に並ぶ。中位まで含めると4段を数えるが、その内、小段⑯は、Ⅱ郭との比高差3.22m、歪な隅丸三角形で基底部の長さ4.2m、幅2.8m。

斜面部の中央には、形の整った堅堀⑰がある。地形の窪みを利用しておらず、標高78mラインから、下位の小段⑰へ下っている。小段⑰は、Ⅱ郭の北斜面部を横断する犬走りである。一連的な削平地であるために、地形の制約を受けて、波打つ状態で走行している。短期間で、造成した結果であろう。Ⅱ郭との比高差8.8m、全長さ40m、幅0.8m～4.0m、東西両端は、極端にすぼまる。

最下位の小段⑱は、全長15m、幅1.5～3.2m、西から東への段状地形で3段からなる。両端の比高差0.64m、最上位と小段⑰との比高差は1.86m。

《Ⅱ-H》Ⅱ郭の西斜面部では、標高80～72mの範囲に、小段群と堅堀がある。小段群は6段を数え、形状から足掛けステップと、犬走りに二分される。ステップの小段⑲は、Ⅱ郭との比高差1.65m、長さ5.8m、最大幅2.0m。小段⑳は犬走りで、小段㉑との比高差3.6m、長さ26.4m、最大幅4.0m、両端は、すぼまる。小段㉒も犬走りであるが、地形に制約されて、凹型のブーメラン形をしている。小段㉓との比高差2.52m、北側の長さ14m、最大幅4.4m、南側の長さ12m、最大幅2.8m、中途で0.6m幅に括れる。弯曲部分は幅1.4mで、凹側に堅堀⑰を取り込む。

《Ⅱ-I》Ⅱ郭の南斜面部では、標高80～69mの範囲に、帯曲輪と小段群がある。帯曲輪⑳は、中央部の標高80.34m、Ⅱ郭との比高差2.45m。Ⅰ郭の南下に見る帯曲輪⑰と同じ性格の削平地で、長さ49m、幅5.5m～8.5m、南端は、すぼまる。これも、郭と呼べる程の平場面積があり、法面も顕著に削り落とされている。両曲輪の法面の高さや、平場面積が、大方、同じで、小段㉔（帯曲輪⑳の北端下）も、帶



第8図 乙城跡模式図③

曲輪②の東端下の小段⑤と同じ配列状態であることに気付く。この様に、地形の制約がありながらも、ほぼ同一規格で造成されている事が興味深い。小段⑦は、帶曲輪③との比高差2.67m、長さ10m、幅3.6m。これより、やや下った斜面部には、3段からなる犬走りの小段群がある。上位の小段⑧は、帶曲輪③との比高差5.40m、長さ23.6m、幅4.0m～5.0m。乙城跡の犬走りとしては、最大級の削平地の面積を有する。北端下には、足場掛けステップの小段が付く。中位の小段⑨は、小段⑧との比高差2.12m、凸型のブーメラン形をしており、北側の長さ25m、幅1.8m～2.4m。南側の長さ7.0m、幅3.8m。弯曲部分の最大幅は3.0m。下位の小段は、中途で途切れている。小段⑩は、小段⑨との比高差1.98m。長さ16.2m、幅2.0m～5.0m。

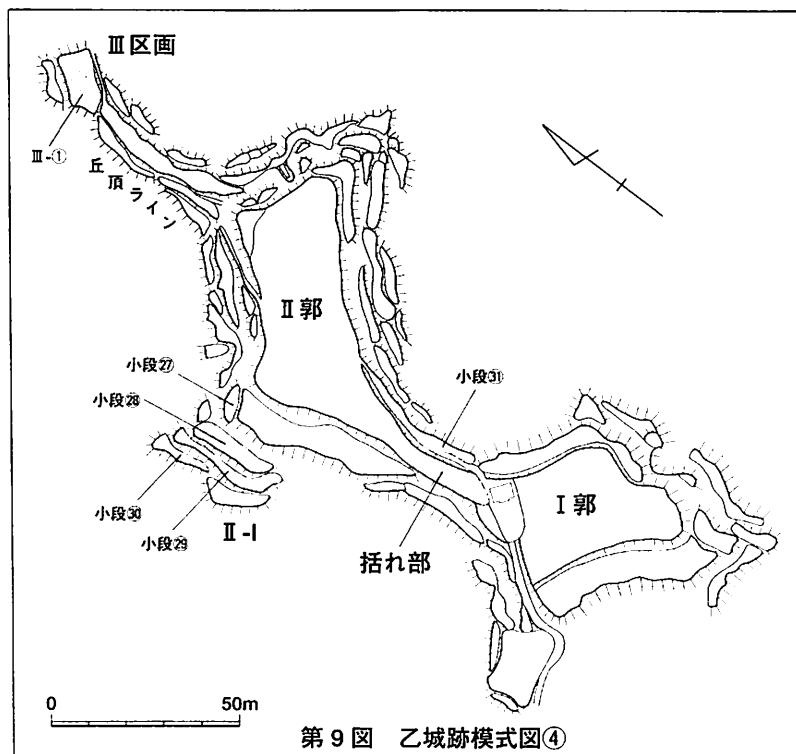
(3) 括れ部

I郭とII郭の間の地形。両郭は、繋がっているために、明確な範囲を表示できないが、およそその長さ35m、最小に括れる箇所の幅は、4.6m。防禦的には、堀切が刻まれる地形であるが、それらしき痕跡は、認められない。現状からしても、その可能性は、少ない。

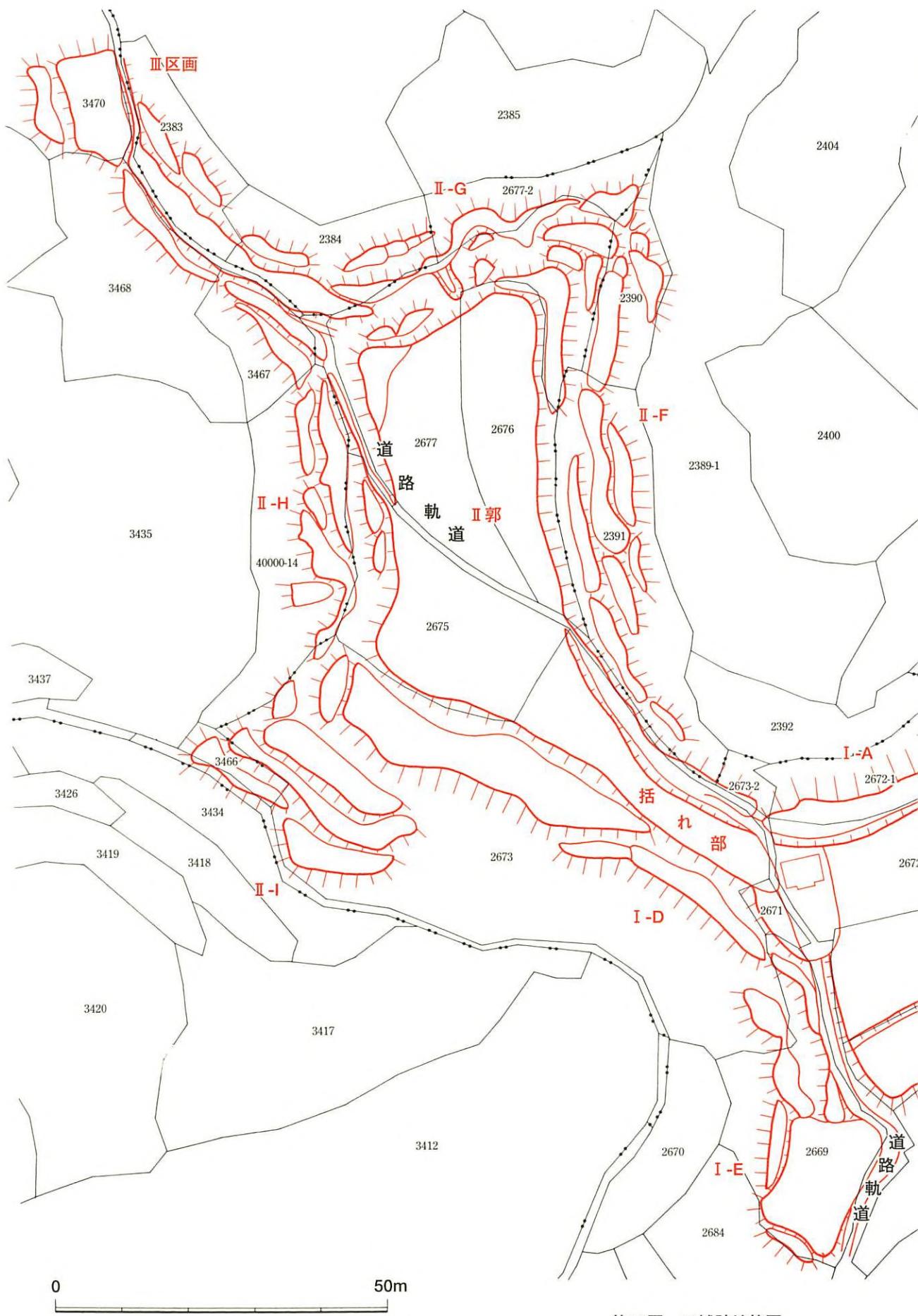
東西両斜面には、小段が残っている。東下には、犬走りの小段⑪が走行する。括れ部との比高差1.56m、全長36.6m、幅1.8m～3.8m。上位の帶曲輪①との間には、長さ1.6mの途切れ部分がある。両者間の比高差0.52m。これぐらいの段差であれば、削平によって、帶曲輪①に繋がる犬走りが出来る筈である。意図的に残された段差であろうか。一方、西下には、小段⑦や帶曲輪③が残る。

(4) III区画

II郭の北下に瘦せ馬地形が北へ延びている。II郭直下との比高差8.20m、丘頂ラインは、長さ43.0m、幅5.2m。東下には、3つの小段があり、西下に犬走りを見る。先端の段下には、小平場(III-①)がある。比高差1.78m、長さ17.0m、幅8.4m。北西下に小段が付く。乙城跡の裏側に該当する区画である。

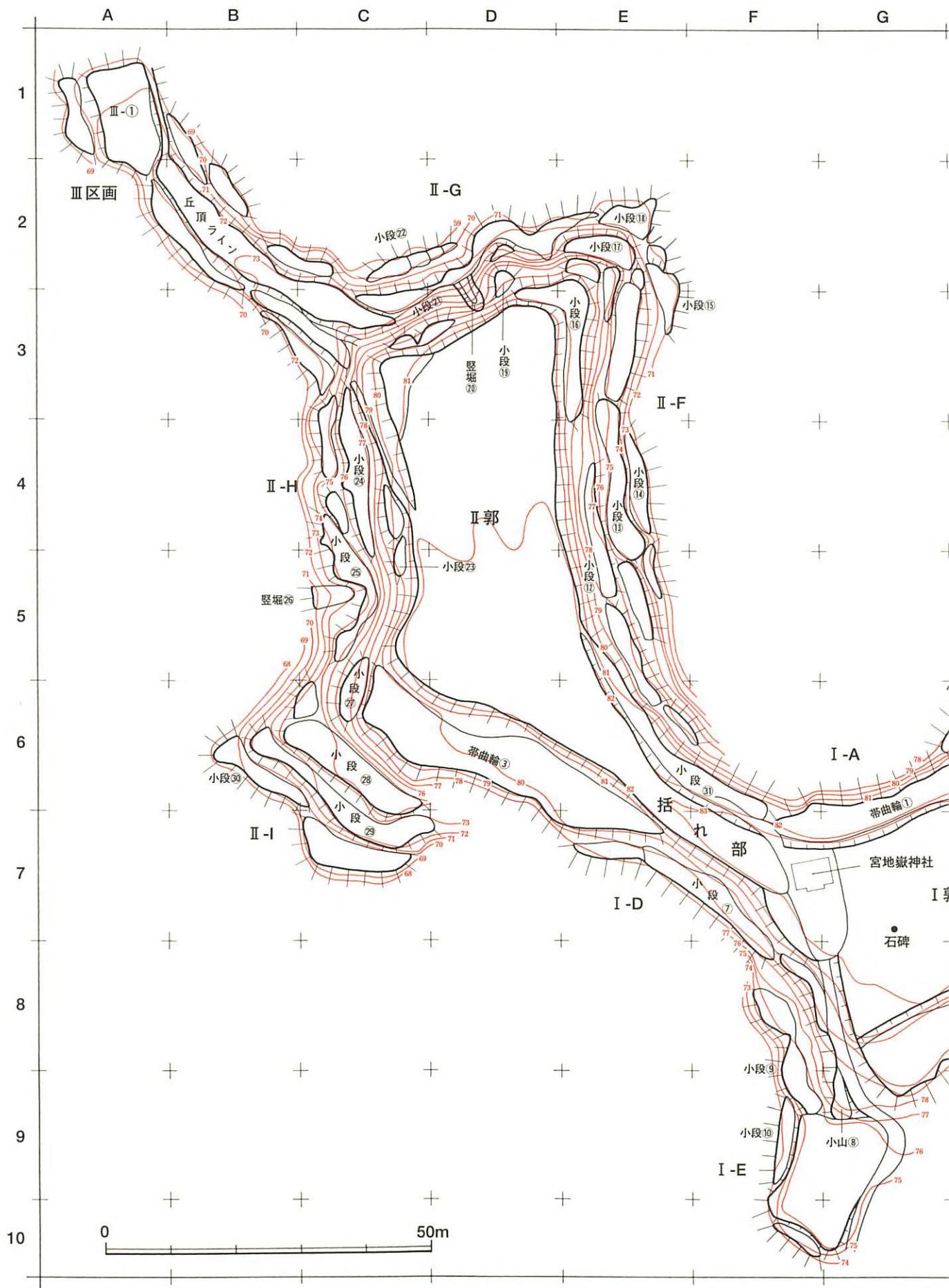


第9図 乙城跡模式図④

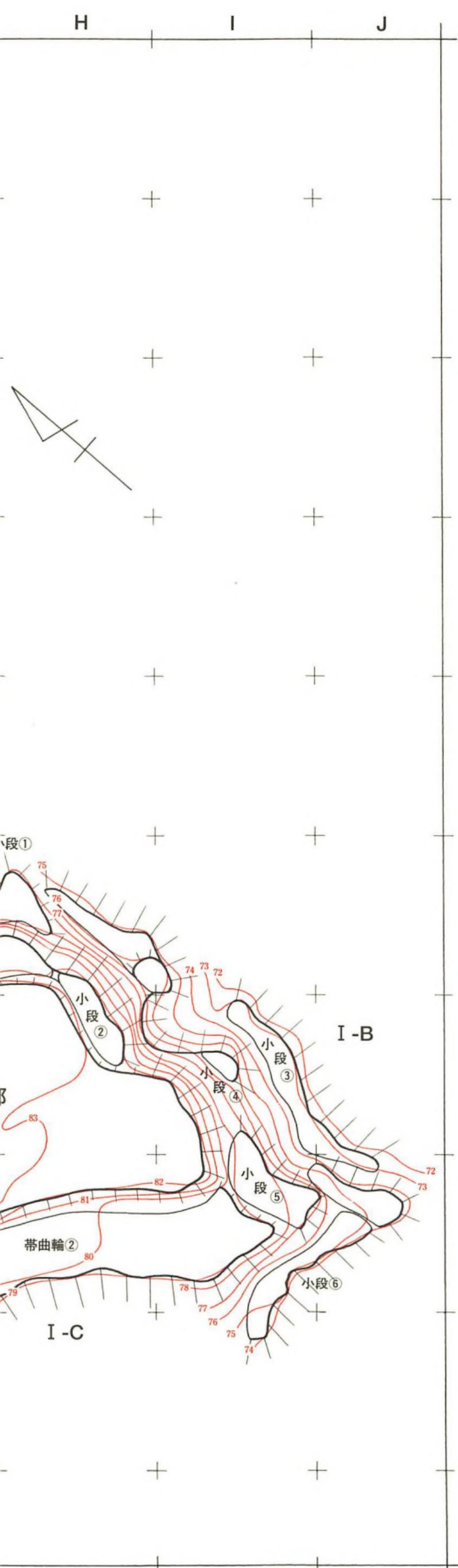


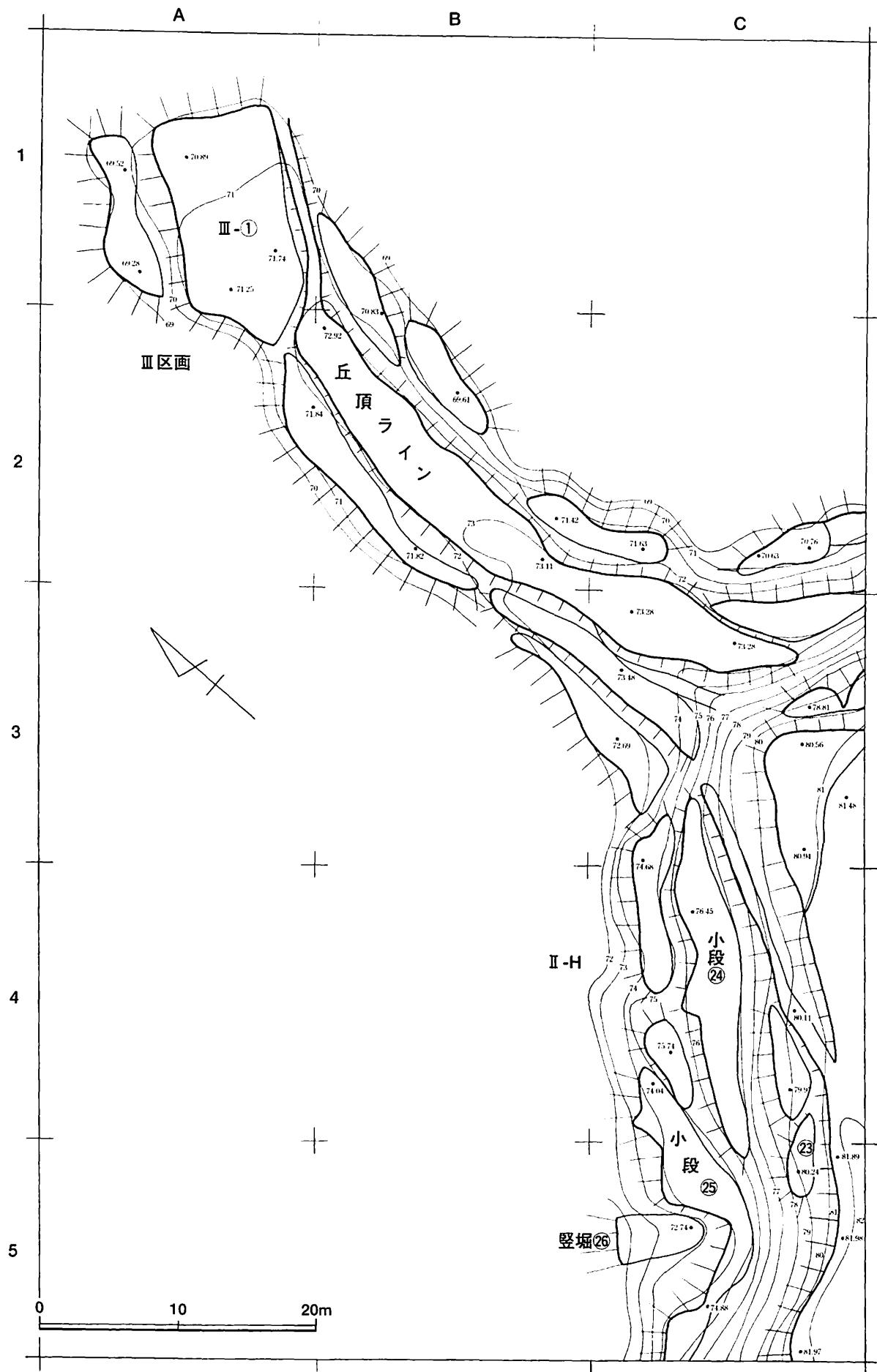
第10図 乙城跡地籍図



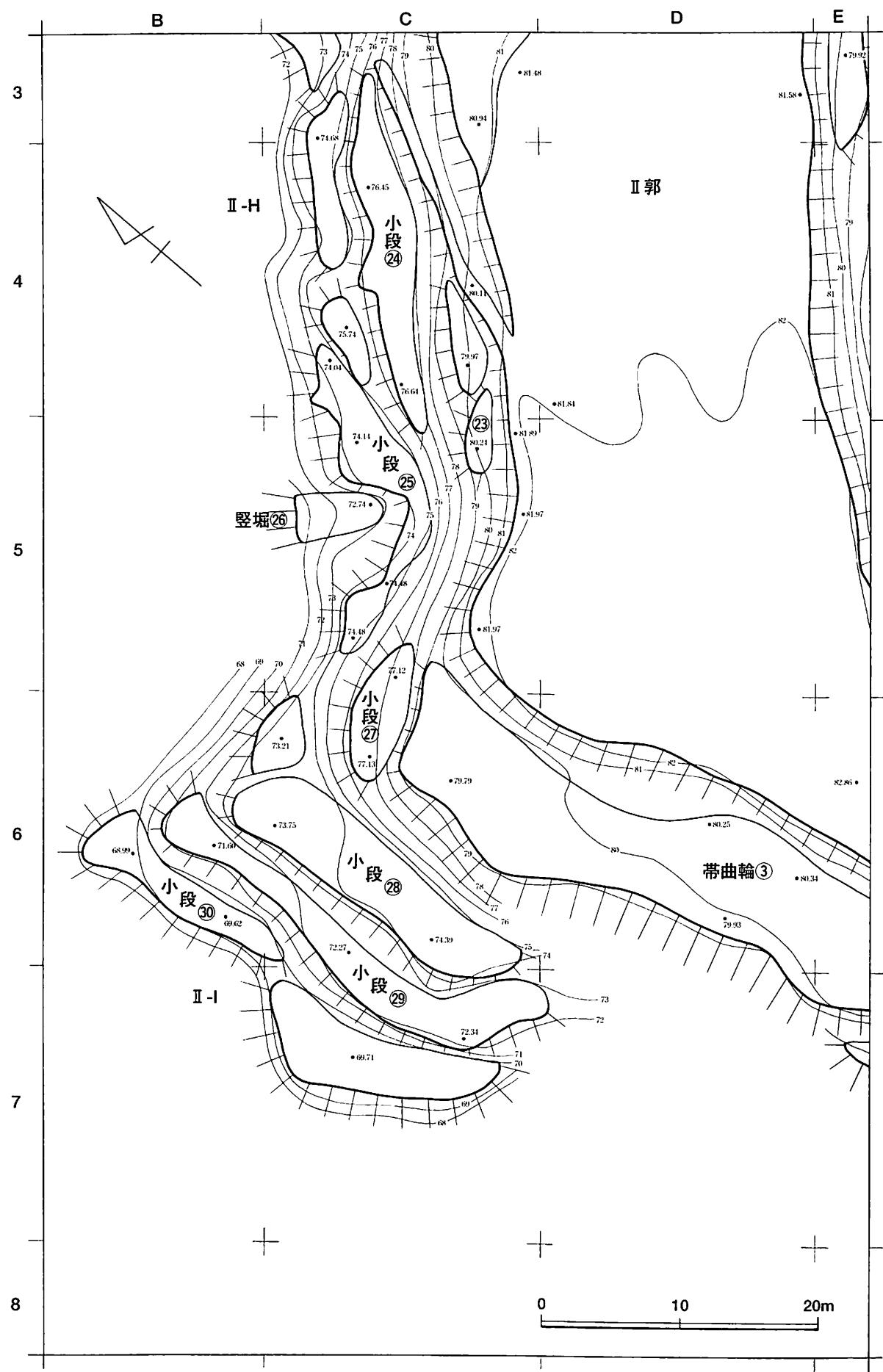


第11図 乙城跡全体測量図およびグリッド設定図

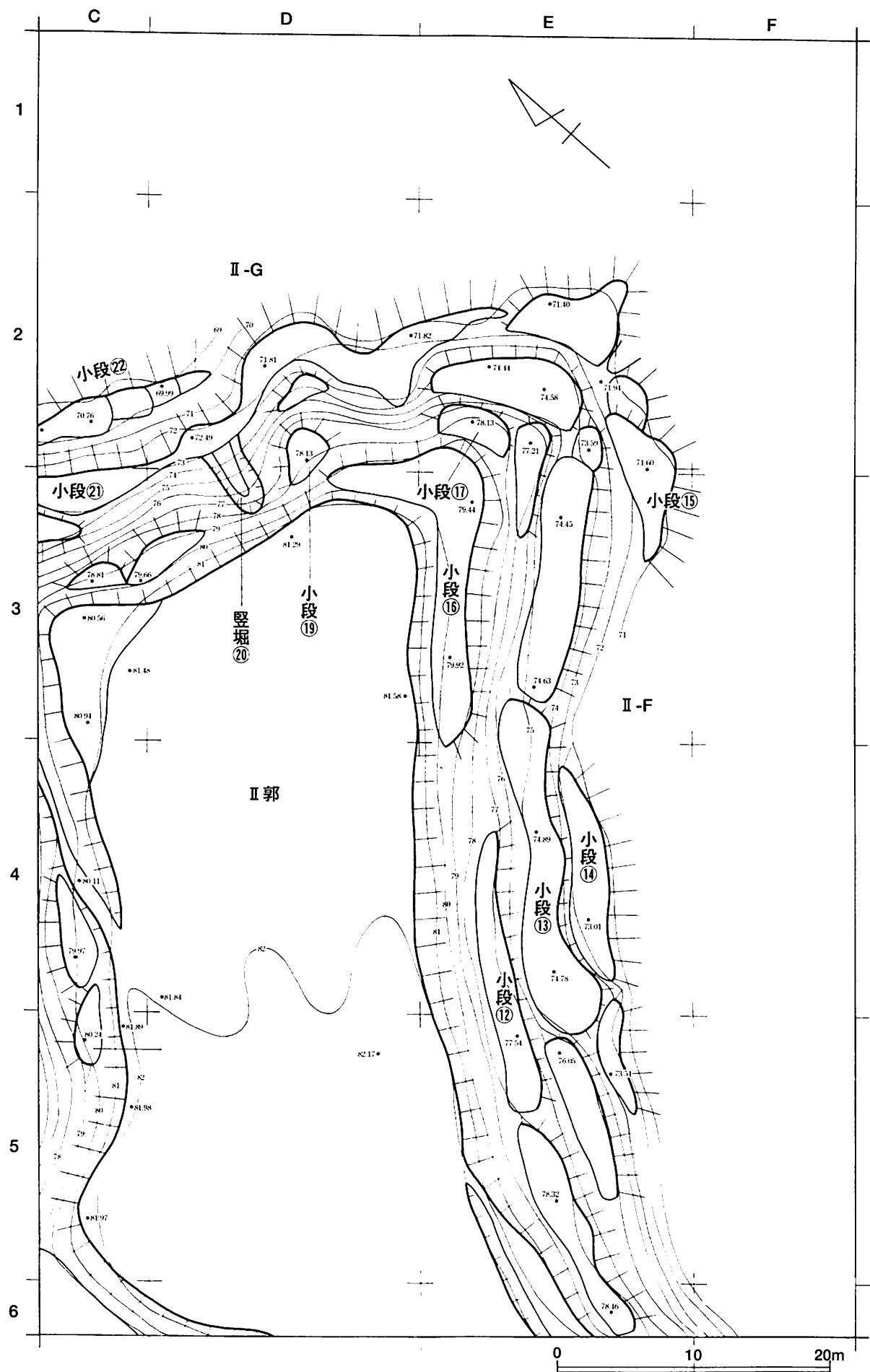




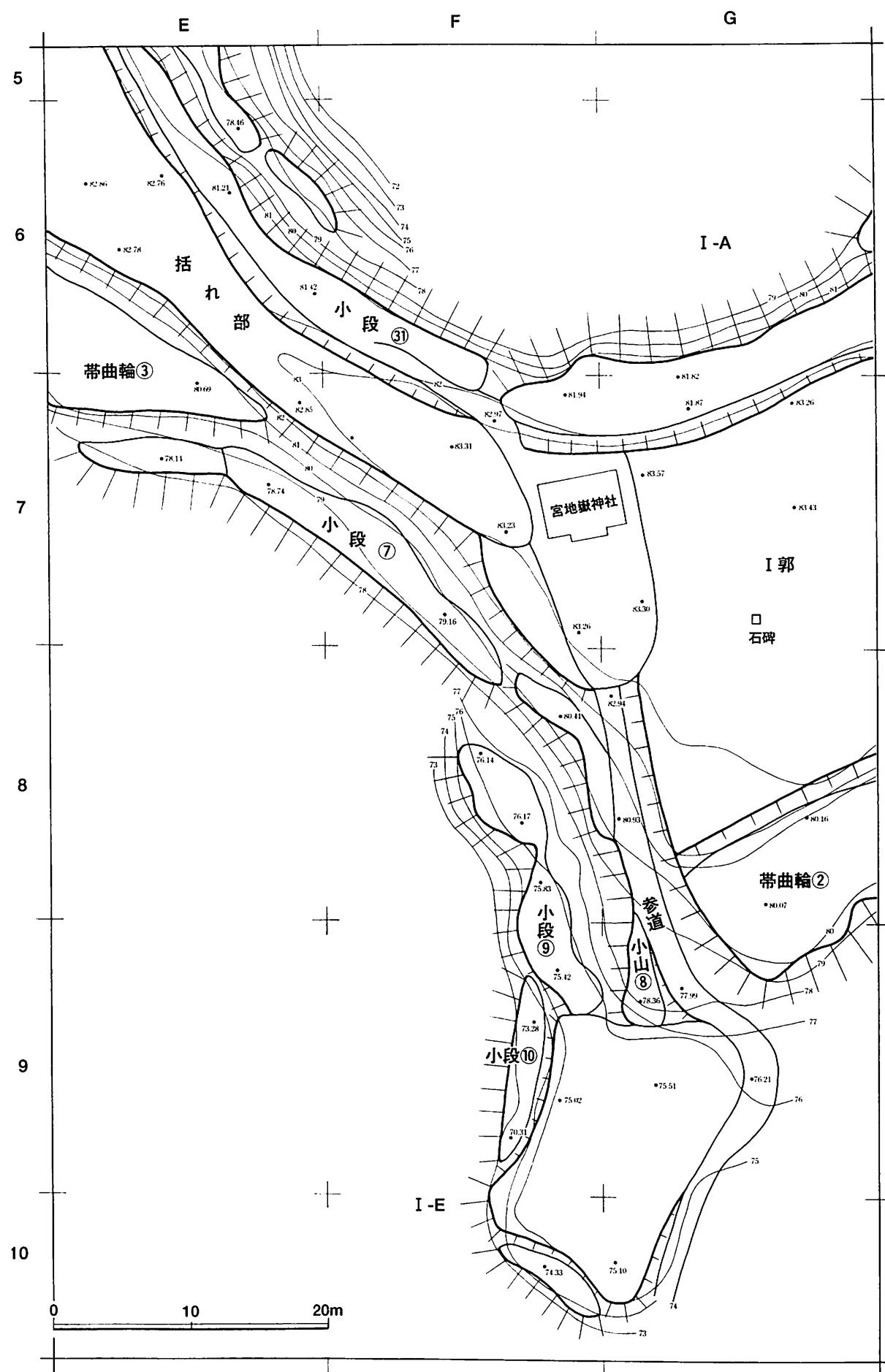
第12図 乙城跡測量図①



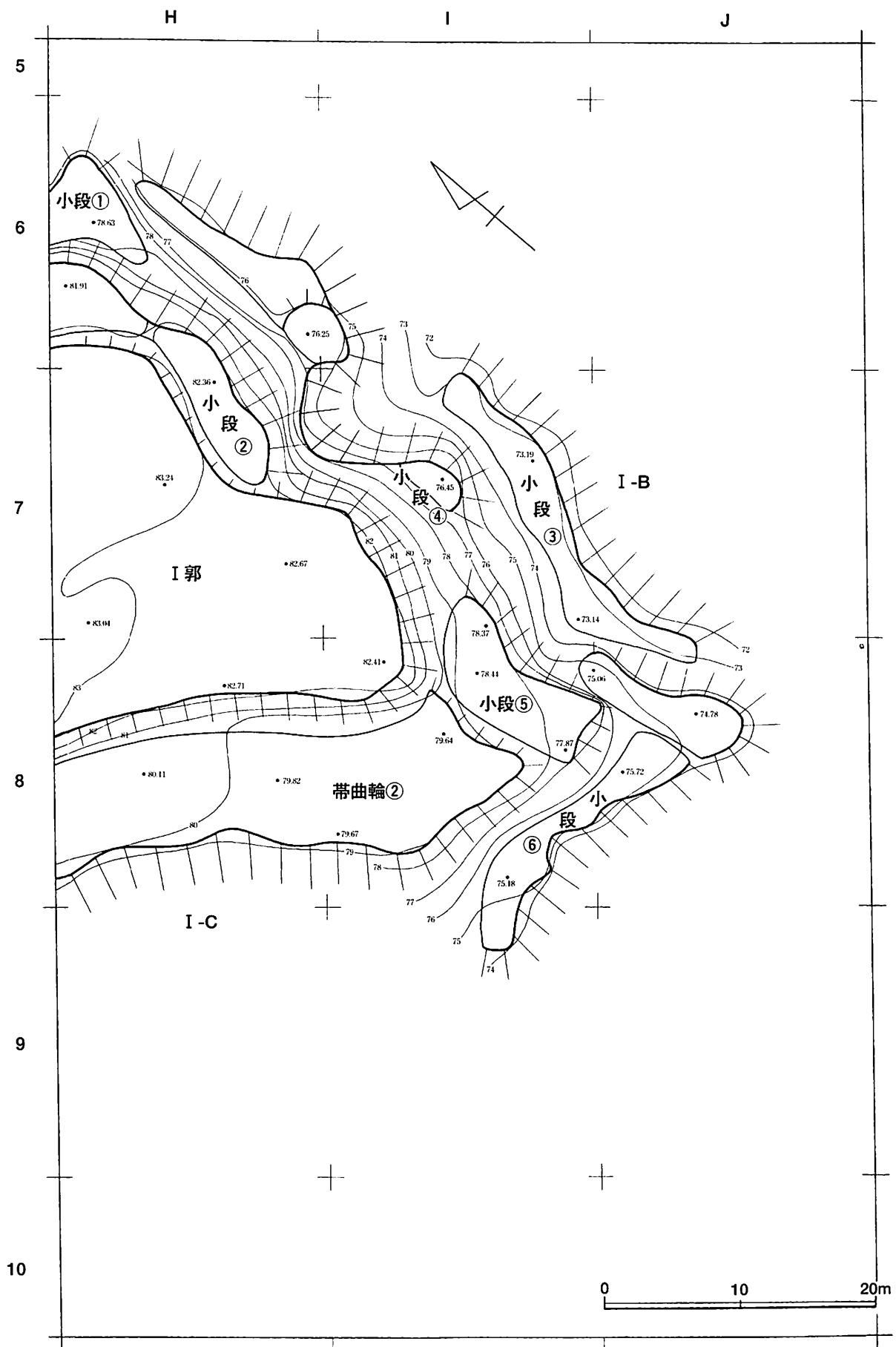
第13図 乙城跡測量図②



第14図 乙城跡測量図③



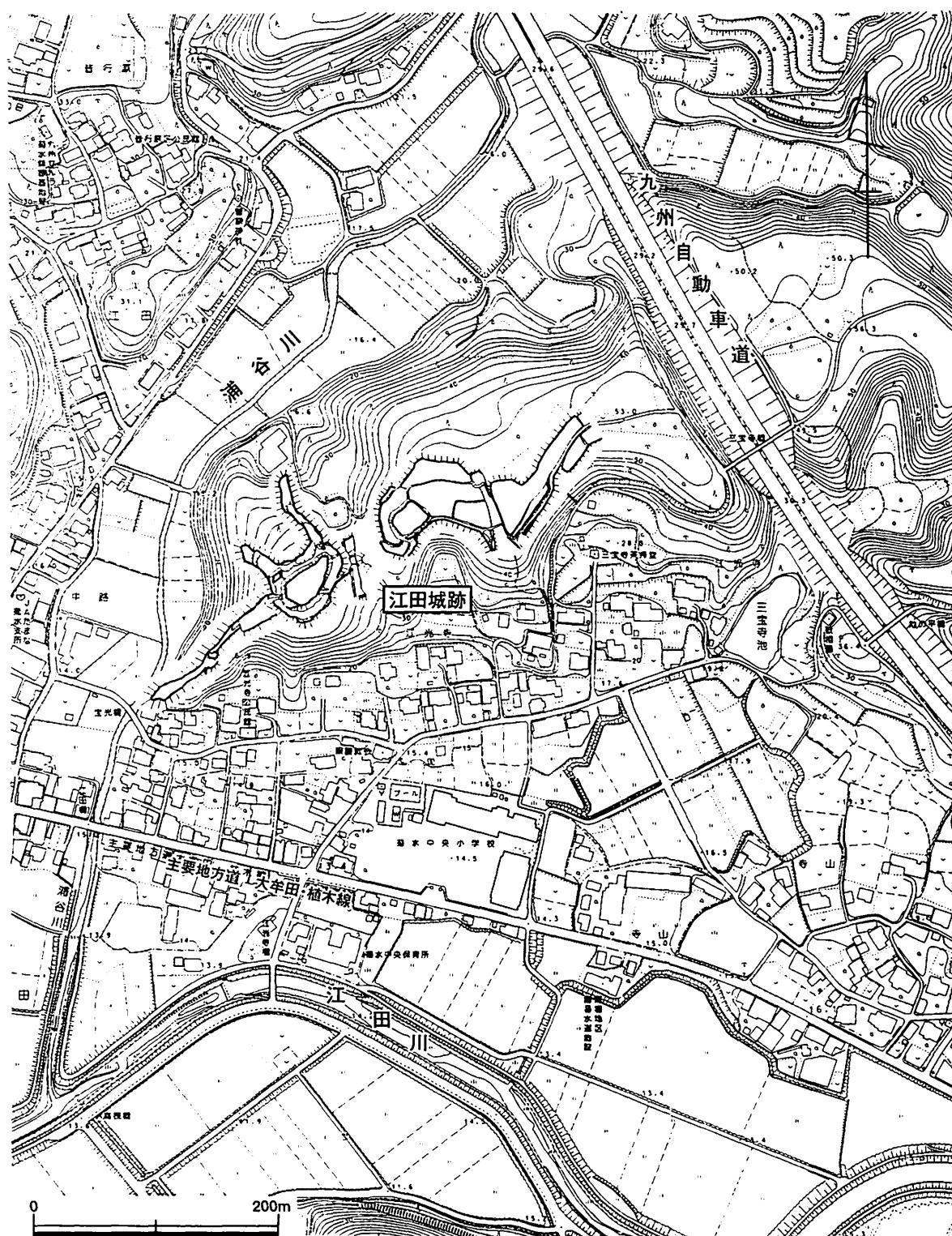
第15図 乙城跡測量図④



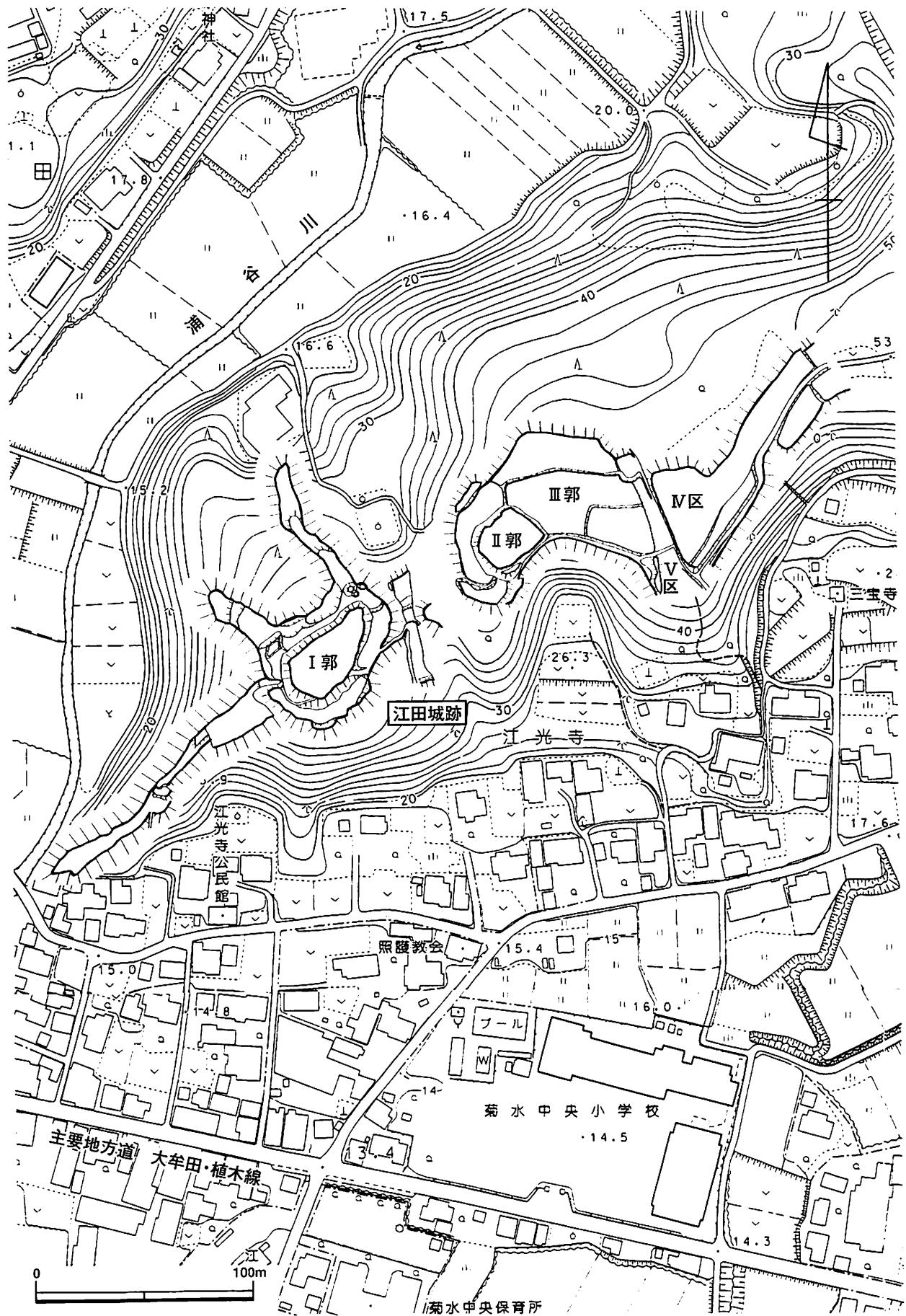
第16図 乙城跡測量図⑤

2. 江田城跡

城跡は、東西方向に主軸を持つ丘陵地を利用している。丘陵先端部の小山地形を中心に、縄張りが展開する。小谷を挟んだ東側の丘陵域にも、一部、縄張りの広がりがある。一方で、丘陵の主軸ラインや角隅下に瘦せ馬地形を見る。一帯は、孟宗竹が林立する所で、一部に杉の植林地もある。以下、縄張りを示す模式図の記号に従って説明を行う。



第17図 江田城跡位置図



第18図 江田城跡周辺地形図

(1) I郭

平場は、やや隅丸の鋭角三角形をなす。位置からして、明らかに江田城跡の主郭である。N34°E方向に主軸の向きがあり、長径46.20m、最大の短径23m。平場は南西側から北東側へ、やや先細りの状態を呈する。標高は、平場の南西寄りで、最も高く、42.14m。近くには「しろさん」と呼ばれる岩と、弁財天を祀った石祠がある。「しろさん」は約百年前に、この地へ運び込まれたものである。今も、地元で管理がなされ、年に一度、1月24日には、燈明を灯し、お神酒と御飯が供えられてきた（森純一郎氏の言）。乙城跡と同様に、この地も、麓住民の精神的な拠り所である。測量調査をしていると、麓の町立菊水中央小学校からは、児童の賑やかな声が聞こえてくる。「集落に密接した城郭」を認識する瞬間である。

I郭の法面は、全て削り落とされ、四方の裾部(I-A～D)に、帯曲輪が巡る。その景観は、あたかも丘頂域に、整形された高台が乗るかの様である。平山城の中心部に見られる典型的な姿である。町内では、用木城跡の主郭が、江田城跡のI郭に酷似する。さらに、I郭から西下方向に延びる丘頂ライン(I-E)には、痩せ馬地形が延びており、平場の北東角隅(I-F)と北西角隅(I-G)にも、同様な地形がある。この部分については、地表面の削平度合いが弱い。

《I-A》I郭の北直下の帯曲輪である。I郭からは、一区画の削平地に見えるが、平場の確保が不十分である。当地に立てば、全体が緩傾斜をなす事が分かる。地形に切れ目は無いが、図面上では、4区画に細分出来る。I郭の北斜面が急勾配をなすために、崖面の掘り込み作業が旨くいかなかったのであろう。全体規模は、長さ37m、幅8.0～10.4m。その中で、内側の帯曲輪①には、不完全ながらも、平場として地形のまとまりが感じられる。犬走り的な役目もあったと思われる。形状は、西側から東側へ、漸次、すぼまり西端とI郭との比高3.85m、長さ37.6m。幅は、西端で6.4m、東寄りで最小1.6m。

《I-B》東直下の帯曲輪である。I郭の平場が、この方向に先細りする事から、直下の裾部も狭く、必然的に小規模な造りになっている。帯曲輪①に似た形状で、2区画に細分される。全体規模は長さ11.0m、幅6.0m。内側箇所は、2.0m幅の道路状を呈し、北端で、そのまま帯曲輪①に繋がる。犬走り的な延長部分と考えてよい。I郭との比高差2.99m。南端は、やや段上がり(比高差0.26m)となって、帯曲輪③に接する。

《I-C》南直下の帯曲輪で、谷部からの登城道①(中程で、道幅1.6m)が中央部を縦断する。全体的に削平の度合いが強く、形の整った平場になっている。東側の帯曲輪③は、I郭との比高差2.64m。長さ28m、幅9m。I郭崖面の削り落としも直の状態にあり、かなりのインパクトを与える。他の崖面と比べても、最高の仕上がりとなっている。グレイドの高さは、この箇所が、江田城の虎口に当る事も一因であろう。

登城道は、上橋に近い形状をなし、L字形に折れてI郭へ上がる。この有様は、桟型の素形と言ってよい。西側の帯曲輪④は、帯曲輪③と横並びするが、地形の関係で一段低くなっている(比高差8.0m)。同様に削平の度合いが強く、I郭との比高差4.81m。この曲輪は、I郭西直下に回り込んでおり、地形に途切れがない。方向的なものを考慮に入れ、図面上で線引きすると、大凡の長さ28m、幅8mとなる。I郭崖面の削り落とは、帯曲輪③のそれと比べると大きな違いがある。その痕跡は、顕著であるが、I郭斜面部の上位を、広めに残しているのが特徴である。図面上では、1m間隔の等高線が、4本も記入出来る。これは、他と比べた場合、斜面部の傾斜角度が、やや緩やかであったことによる。その分、崖面の切り込みが、手前で終わったことになる。同様な状態は、I郭の西直下にもある。

《I-D》西直下の帯曲輪で、前述の様に帯曲輪④から連続するものである。これ又、図面上で線引きすれば、帯曲輪⑤は、大凡の長さ27.5m、幅4.0m～6.0m、I郭との比高差4.01m。中央部にI郭西端からの登城道②が下る。この場合は、斜面部で、やや凹道となり、下位で、帯曲輪⑤の内縁を走行する。

(2) I-E

I郭から西下方向に延びる丘頂ラインで、末端は、江光寺地区の家屋に接している。典型的な痩せ馬地形で、古代山城に見る土壘線の様相を呈する。

《I-E-①》丘頂ラインの突端で、帯曲輪⑤の北端に竪堀状の極小谷が下っており、これが、そのまま西側からの登城道②になる。

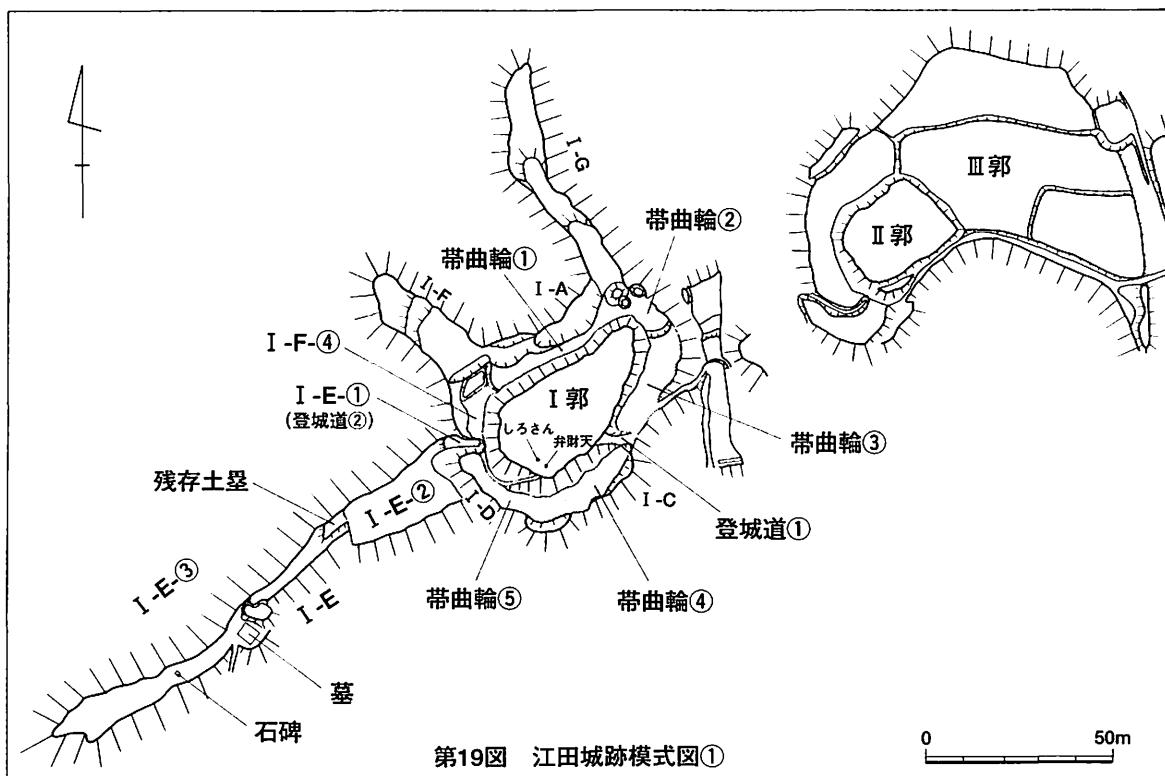
《I-E-②》I郭の西端から見ると、確かに形の整った平場である。しかし、当地に立てば、削平の度合は弱く、区画内に自然地形の残る事が分かる。地表面は、やや丸みを帶びて、縁の整地も甘い。それでも、人の手が加わっている事が確かで、この点が疑問である。長径30m(丘頂ラインに沿う)、幅は、東端で15m、西端で9.8m。中央部がやや窪んでおり、I郭下の小鞍部をなす事を示している。確かに、東端から0.55m、西端から1.1mの比高差がある。中世城のセオリーからすれば、堀切が刻まれる箇所である。最も、地表面の観察では、その様に受け取れないが、後世に埋め込まれた可能性も否定出来ない。

《I-E-③》この箇所から丘頂ラインは、全くの痩せ馬地形となる。それでも、この東端箇所に限っては、長径16m、短径6.5mの範囲に32mの等高線が巡り、やや小山を呈する。最高所の標高は32.69mで、この箇所に限れば、先に述べた堀切の可能性から、それに関連した搔上げ土壘の残存地形とも受け取れる。

図面上での丘頂ラインは、東端部を含めて、長さ100m弱、幅3.0m~10.4m。大方、自然地形であるが、先端部近くは、やや削平状態にあり、上面域は、ラッパ状に開く。両端の比高差は、17.85m、中途に近世墓所があり、その上段(標高27.31m)には、長さ7.0m、幅2.6m~3.8mの小段状地形が付く。総じて、北側斜面部は、絶壁に近い斜面となって、城跡地に相応しい様相を呈する。

(3) I-F

I郭から北西方向に下る派生ラインである。I郭直下の付け根には、小段状の削平地I-F-④がある。やや隅丸の鈍角三角形を呈し、I郭との比高差3.98m、長さ14m、最大幅7.0m、北縁には、若干の高まりを見る。



I-E-③の東端と同様に土壘の残存地形であろうか。そうなれば、I-F-④には、派生ラインを断ち切る堀切が埋没していることになる。地形的には、十分、考えられる状況にある。この高まりから下位は、図面上の長さ34m、上面域は帯状をなし、中央部の幅11m、先端部の標高26.68m。削平の度合いは、全体的に低い。

(4) I-G

I郭から北方向に下る派生ラインである。I郭直下の付け根には、直径3.0mの円形の窪みが残っている。しかし、数十cm程度の深さに留まり、性格は不明。北縁には、若干の高まり(比高差約0.3m)を見る。全体が小山状をしており、先に取り上げた土壘の残存地形とも受け取れる。そうすると、埋没堀切と、円形の窪みとの関係が不可解なものとなる。

《I-G-⑤》I-Eと同様な痩せ馬地形である。図面上での長さ40m、幅6.0m、地形の変化点に当る先端部で、5.6mの比高差がある。上面域の削平度合いは、低い。

《I-G-⑥》派生ラインの最下位に当り、やや、幅広の状態になる。図面上での長さ23m、幅は、10m～8.0m、ここは著しく、削平の度合いが低い。先端部での標高は、27.81m。

(5) I-H

I郭とII郭を分ける堀切で、丘陵の括れ部(自然谷)に手が加えられている。中央部に、ある程度の平地I-H-⑦が確保されており、これを境にして谷底が北側(I-H-⑧)、南側(I-H-⑨)へ緩やかに下る。平時の際の登城道でもある。

《I-H-⑦》堀切の背中にあたり、長さ6.0m、幅4.4mの平地である。南北両端に32mの等高線が入り、I-Cとの比高差は、6.4m。

《I-H-⑧》北側の谷部に向かって、ラッパ状に開き、長さ13m、北端幅9.6m、I-H-⑦との比高差は1.76m。西壁は、削り落されている。

《I-H-⑨》I-H-⑥程に堀底としてのまとまりが感じられない。ただし、東壁の削り落としは、かなりのインパクトがある。

(6) II郭

I郭の東側に堀切I-Hを挟んである。本体丘陵地の西端にあたり、方形を呈する高台。削り残しの人工地形で、標高46.57m(東縁の中央部)、長径27.4m、幅は北東縁で21m、南西縁で、ややすぼまり15m。このII郭を軸にして、北下～西下に帯曲輪(II-⑩・⑫)と、南西下に小溝(II-⑪)を見る。II郭の四方崖面は、いずれも端麗に削り落とされて、城跡地に相応しい景観を呈する。この高台を江田城跡のII郭と見なす所以である。

《II-⑩》II郭の北下～西下を廻る弧状の帯曲輪で、全長52m、幅は、12m～6.0m、中央部で括れる。II郭との比高差は、北下で3.71m、西下で3.59m。北端下には、段下がりの小区画が付く。比高差0.62mで、長さ18.6m、幅3.0m。これより北域は、正に要害の地で、絶壁に近い地形となる。

《II-⑪》帯曲輪の南縁を廻る弧状の小溝。全長19.0m、幅2.2m、深さ0.51m、空堀の形状とは、やや異なり、後世に掘られた可能性もある。

《II-⑫》小溝(II-⑪)の南側にあり、全体が少し盛り上がった感じで、土壘の様な地形をしている。弧状をなし、全長25m、最大幅8.0m。II-⑩帯曲輪の西端とは、0.40mの比高差がある。この区画の西域は、標高42mから35mラインまで、緩傾斜をなす。端麗な削り落としが入るのは、標高34mラインからで、この部

分が、先述の I-H-(9) 堀切の東壁となる。

(7) III郭

II郭の東域にあたる。南東方向に弯曲しており、主軸の向きは、N76°E。城跡の外郭にあたり、全長60m、幅は、東端で14.6m、中央で28m、西端で10m。南東隅は、比高差0.29mの微高地III-⑩になっている。この郭の東端には、堀切状の窪地III-⑨が走る。さらに、北下には、帶曲輪III-⑪も廻る。この区域までが、江田城跡の範囲である。

《III-⑫》長さ28.5m、幅は、東端で22.4m、西端で13m。インパクトは弱いが、城跡地に、よく見られる平地を細分する区画である。

《III-⑬》隅丸の台形を呈し、中央の南北幅14m、長さは、北縁で31m、南縁で57m。III-⑭との比高差は、1.65m。平地の真中を標高43mの等高線が横断する。肩部となるIII郭の崖面は、削り落とされている。

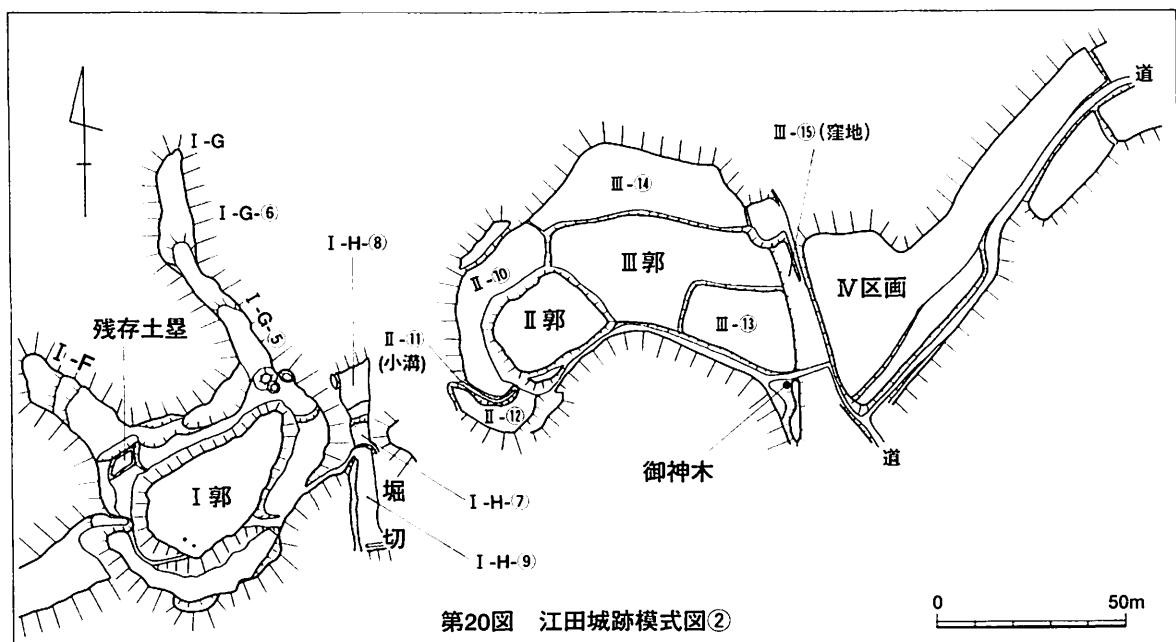
《III-⑮》帯状の窪地で、多少、浅いが、長さ34m分が、堀切の様相を呈する。中央部での幅6.0m、比高差は、III-⑭から0.92m、外縁地区のIV区画から1.40m。江田城跡の東端にあたる遺構で、これより東域の丘陵地(IV区画)は、地形が一変する。

(8) IV区画

江田城の外縁地区にあたる。今回、参考までに、丘頂域を測量した。丘頂ラインに沿って平地が続き、長さ90mまで殆ど、高さは変わらない。南北両縁下に標高46mの等高線が走る。この地には、江田城への搦め手ルートが残っている。この道は、三宝寺地区から乙城へ向かう山道から分岐したものである。区画の丘頂ラインを走り、今日、舗装されて農道化しているが、IV区画の真中あたりで山道に戻る。残存状態は、良好で、IV区画の南下を走行している。

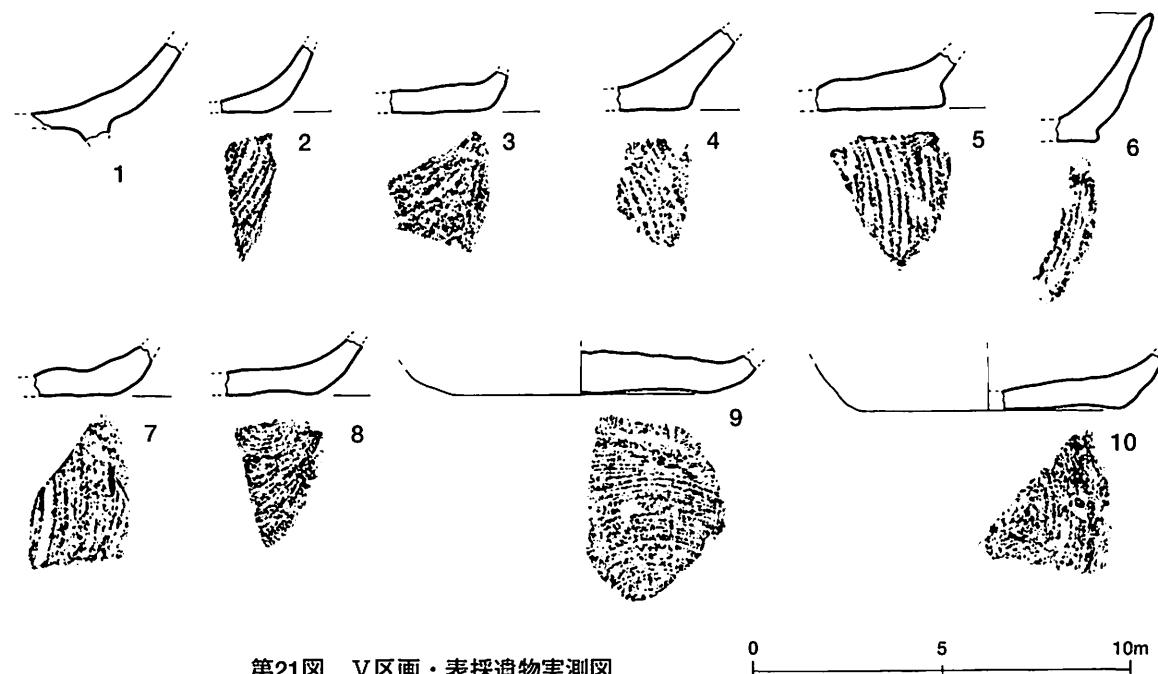
(9) V区画

III郭の南東隅に小山(北下との比高差1.57m)があり、ここに山の神が祀られている。三宝寺地区が管理しており、株の大木が御神体である。神木の周りには、糸切り土師器片が散乱しており、中世から信仰の対象地であったことが分る。



(10) V区画・表探遺物

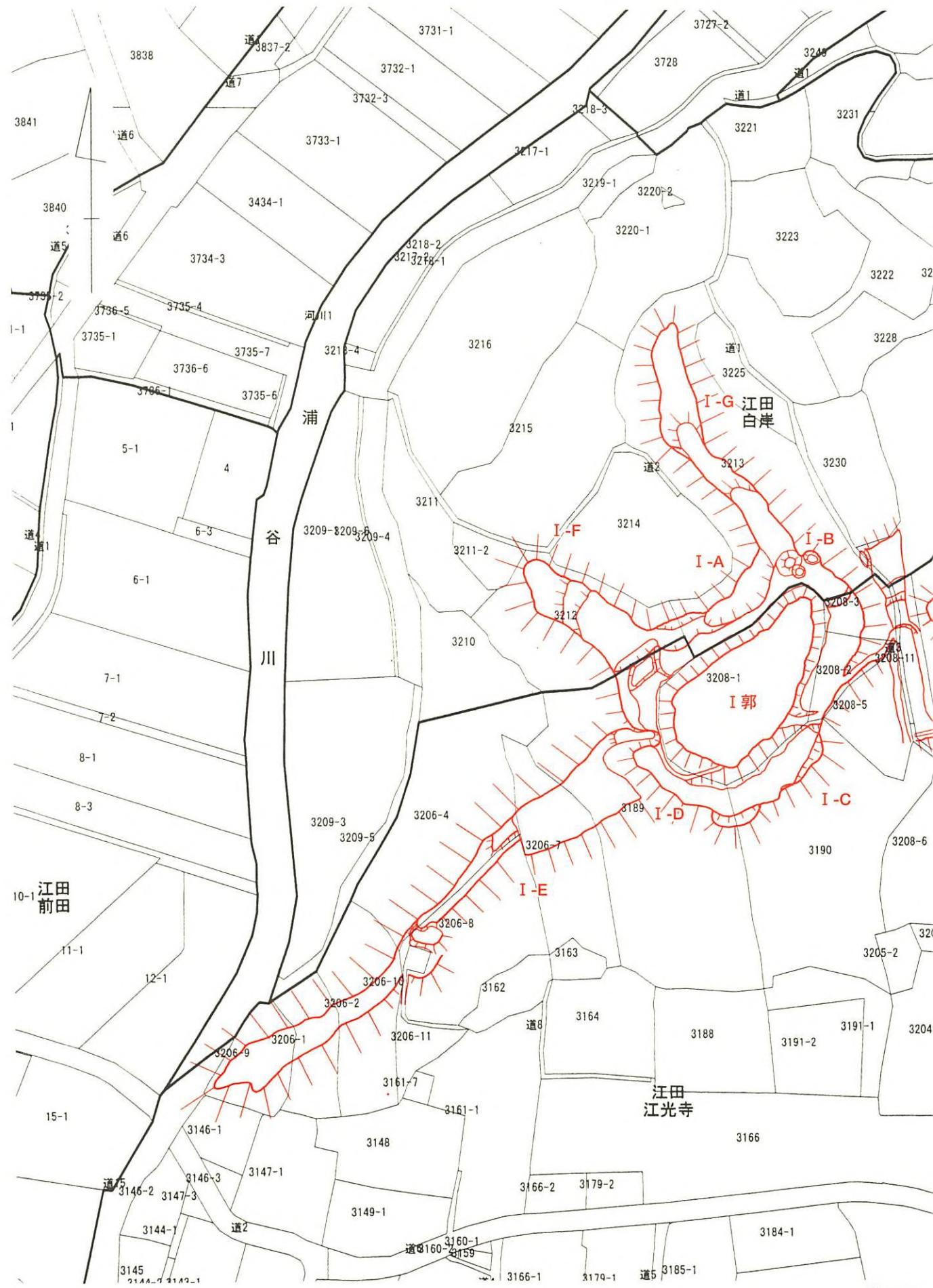
1は陶器碗片で、外器面に斜めの搔目痕がある。焼成は良好で、釉に貫入が入る。
2～10は土師器で、2～4・7・9・10は皿、5・6・8は杯である。いずれも底部に糸切り痕が残るが、3はやや磨滅している。4は外底端で肥厚する。5の底部は扁平。体部は立ち上りで一旦窪む。6の体部は、やや内湾気味に立ち上がり、口縁部でやや外弯する。7の底部は肥厚する。8は器面にロクロ痕が残る。9は復元底径7.0cmで、底部中央は肥厚する。10は復元底径6.8cm。いずれも焼成は堅緻、胎土は精良。



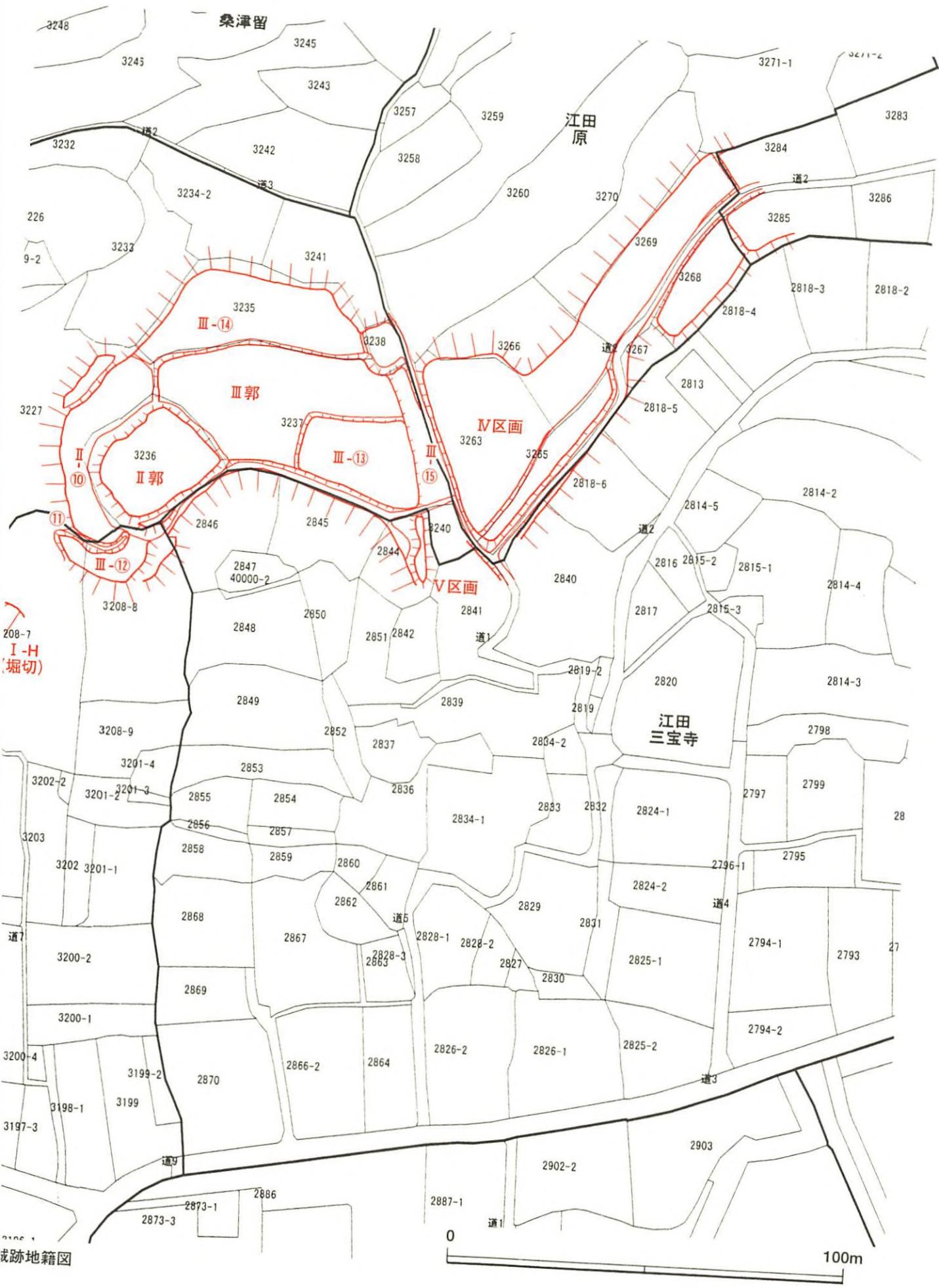
第21図 V区画・表探遺物実測図

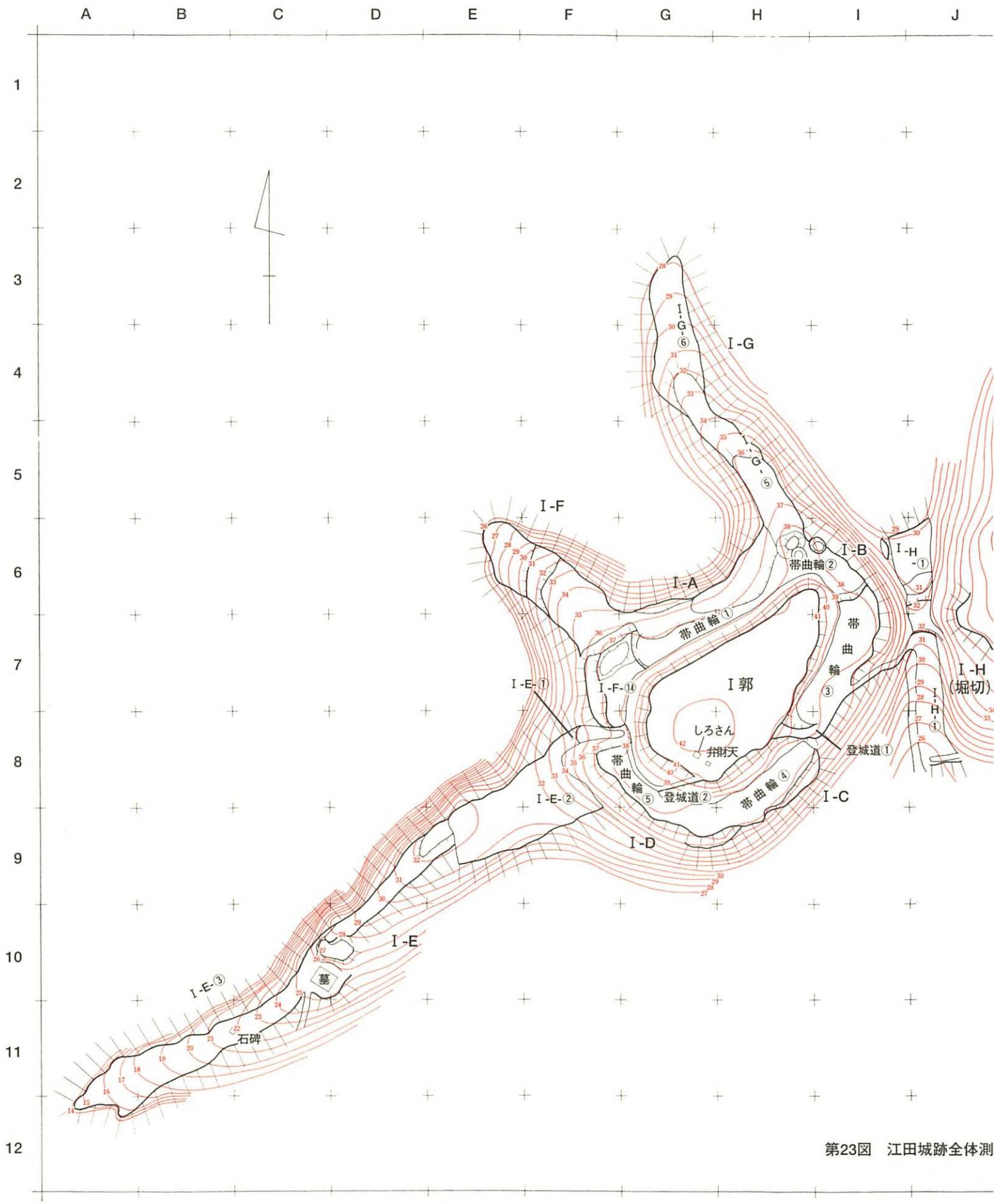
No	器種	器厚	形態の特徴	調査・文様	備考
1	陶器 碗	体部中位 5mm 下位 7mm 底部端部 6mm	体部は内窪する	〔外器面〕斜めの搔目痕 貫入が入る	〔釉色〕白灰色 〔胎土〕乳褐色・精良 〔焼成〕良好
2	土師器	体部下位 4mm 底部中央 4mm 端部 6mm	体部は内窪する	〔底部〕糸切り痕	〔色調〕暗褐色 〔胎土〕精良 〔焼成〕堅緻
3	土師器	体部下位 4mm 底部中央 6mm 端部 7mm	底部は扁平	〔底部〕糸切り痕は磨滅	〔色調〕暗橙褐色 〔胎土〕精良 〔焼成〕堅緻
4	土師器	体部下位 6mm 底部中央 7mm 端部 9mm	外底端で肥厚する 体部はやや外弯する	〔底部〕糸切り痕	〔色調〕橙褐色 〔胎土〕精良 〔焼成〕堅緻
5	土師器 杯	体部下位 6mm 底部中央 8mm 端部 10mm	底部は肥厚する 立ち上がりに凹線	〔外内器面〕ロクロ痕 〔底部〕糸切り痕	〔色調〕暗橙褐色 〔胎土〕小石粒が混じる 〔焼成〕堅緻
6	土師器 杯	体部上位 4mm 中位 7mm 底部端部 7mm	口縁部でやや外弯する 体部は中途で肥厚する 立ち上がりに凹線	〔外内器面〕ロクロ痕 〔底部〕糸切り痕	〔色調〕暗褐色 〔胎土〕小石粒が混じる 〔焼成〕堅緻
7	土師器	体部下位 7mm 底部中央 8mm 端部 6mm	底部は肥厚する	〔底部〕糸切り痕	〔色調〕明褐色 〔胎土〕精良 〔焼成〕堅緻
8	土師器 杯	体部下位 6mm 底部中央 7mm 端部 7mm	体部は内窪する	〔外内器面〕ロクロ痕 〔底部〕糸切り痕	〔色調〕明褐色 〔胎土〕精良 〔焼成〕堅緻
9	土師器	体部下位 7mm 底部中央 11mm 端部 9mm	復元底径 7.0cm 底部中央は肥厚する	〔内底面〕波状の凹凸 〔底部〕糸切り痕	〔色調〕暗褐色 〔胎土〕精良 〔焼成〕堅緻
10	土師器	体部下位 6mm 底部中央 7mm 端部 8mm	復元底径 6.8cm 体部は内窪する	〔底部〕糸切り痕	〔色調〕乳褐色 〔胎土〕精良 〔焼成〕堅緻

V区画・表探遺物観察表

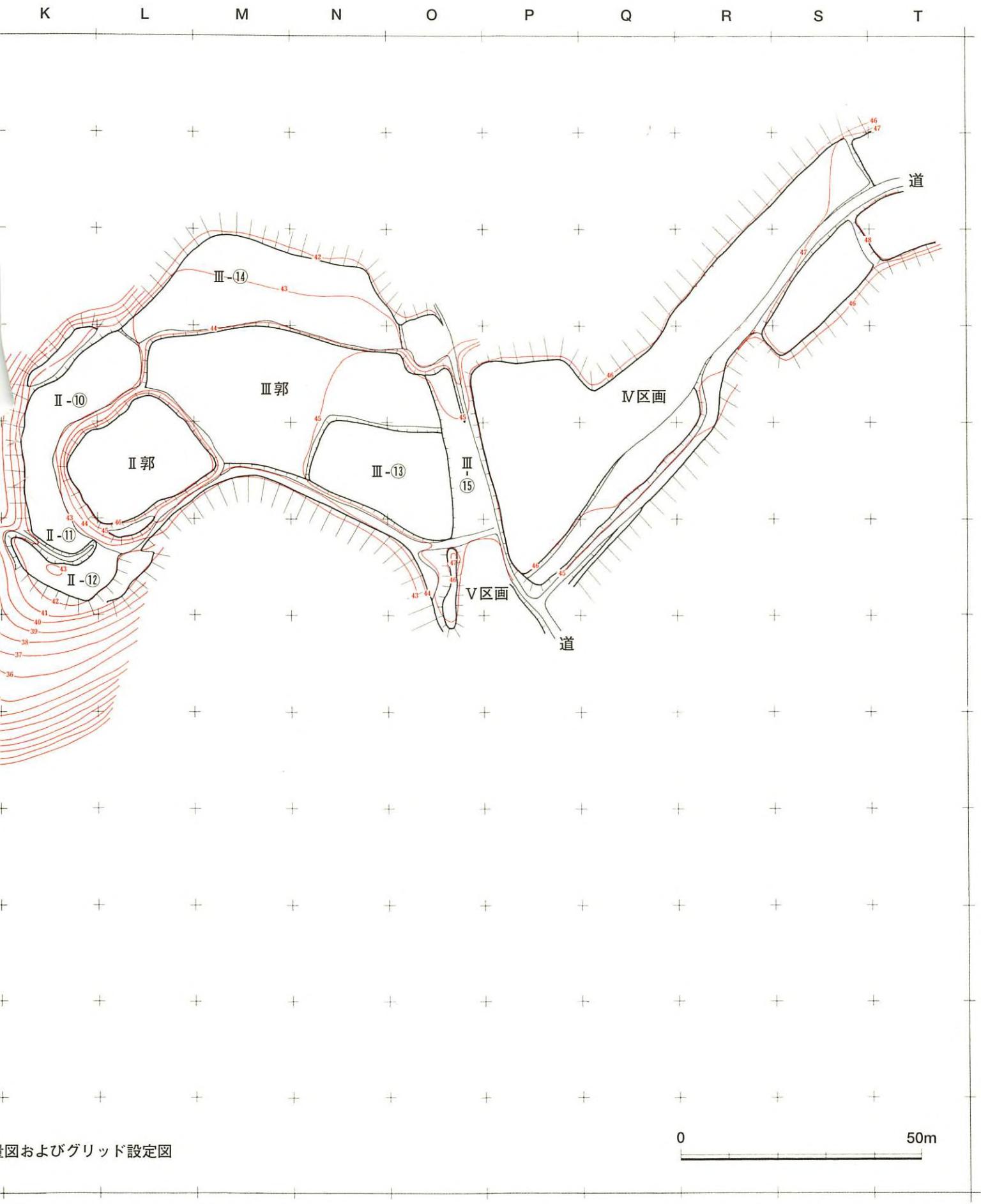


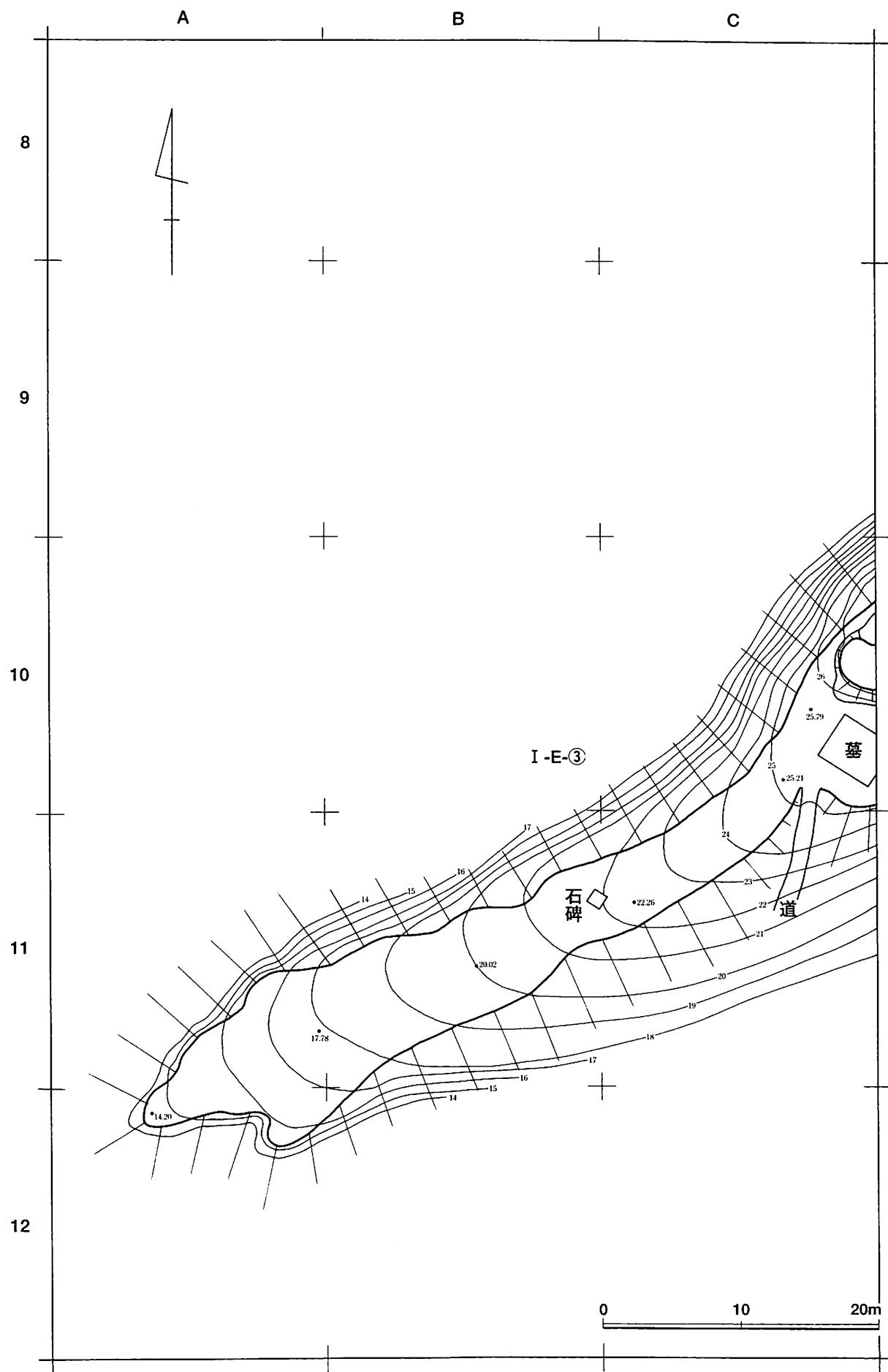
第22図



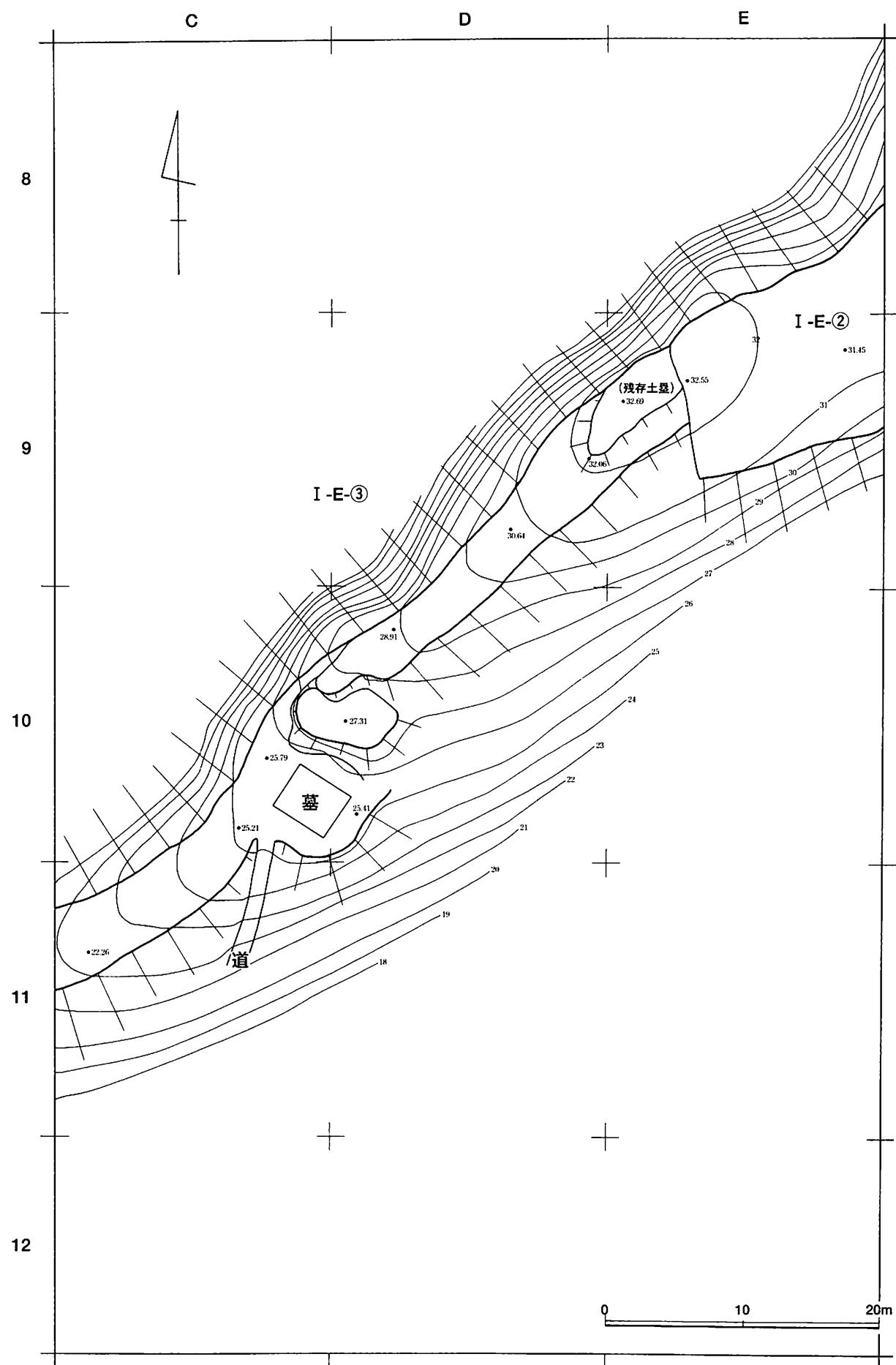


第23図 江田城跡全体測

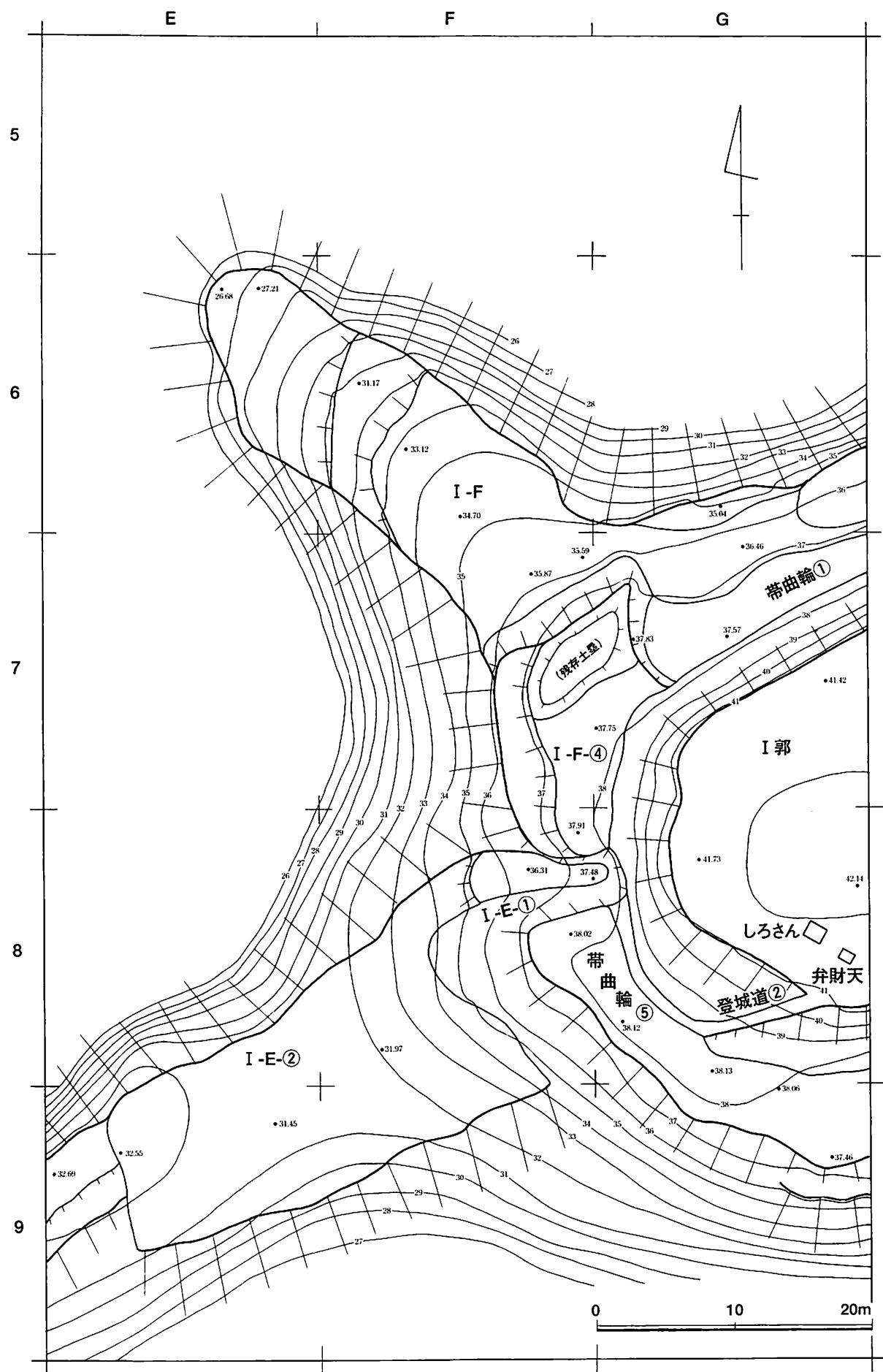




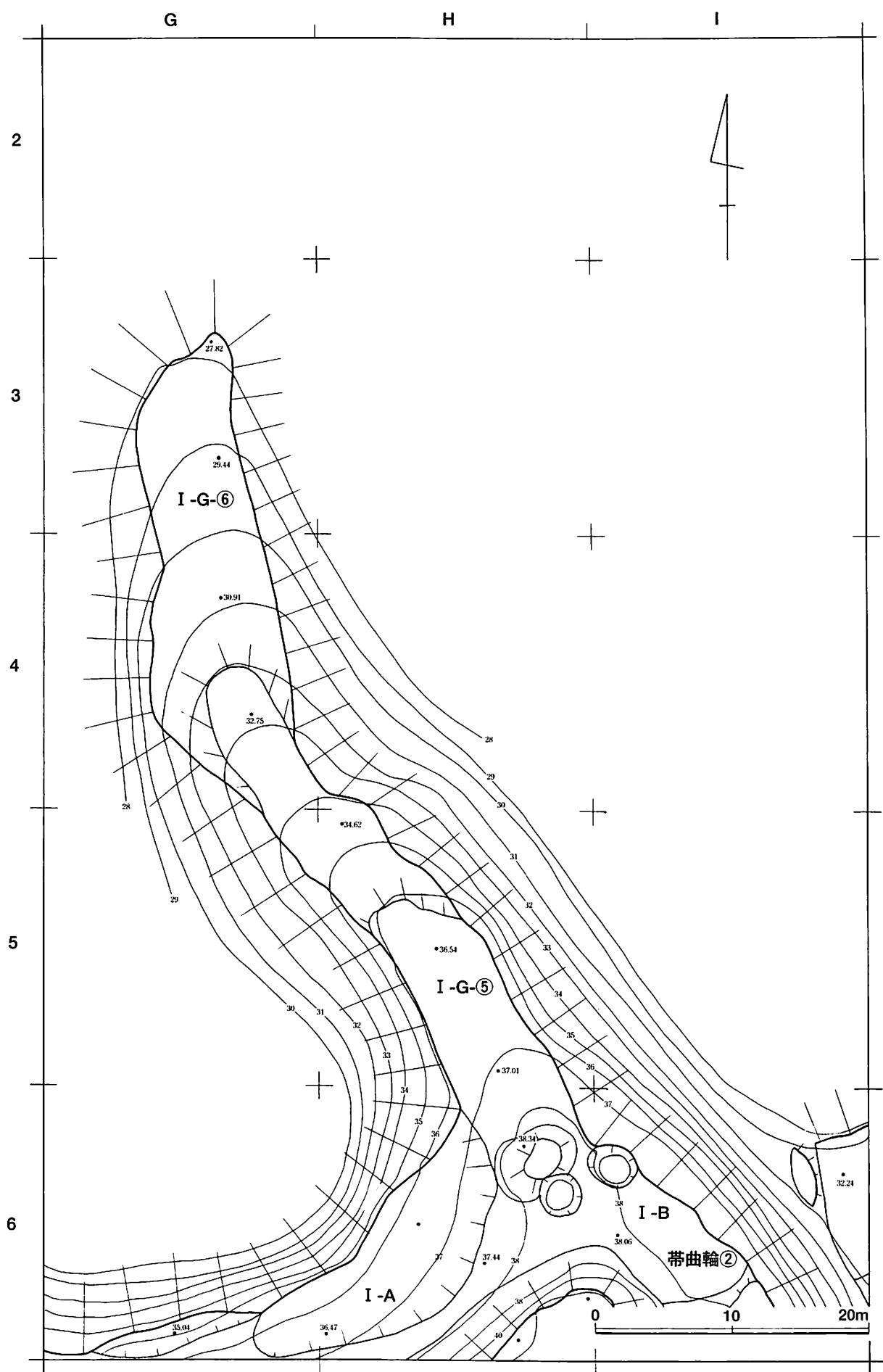
第24図 江田城跡測量図①



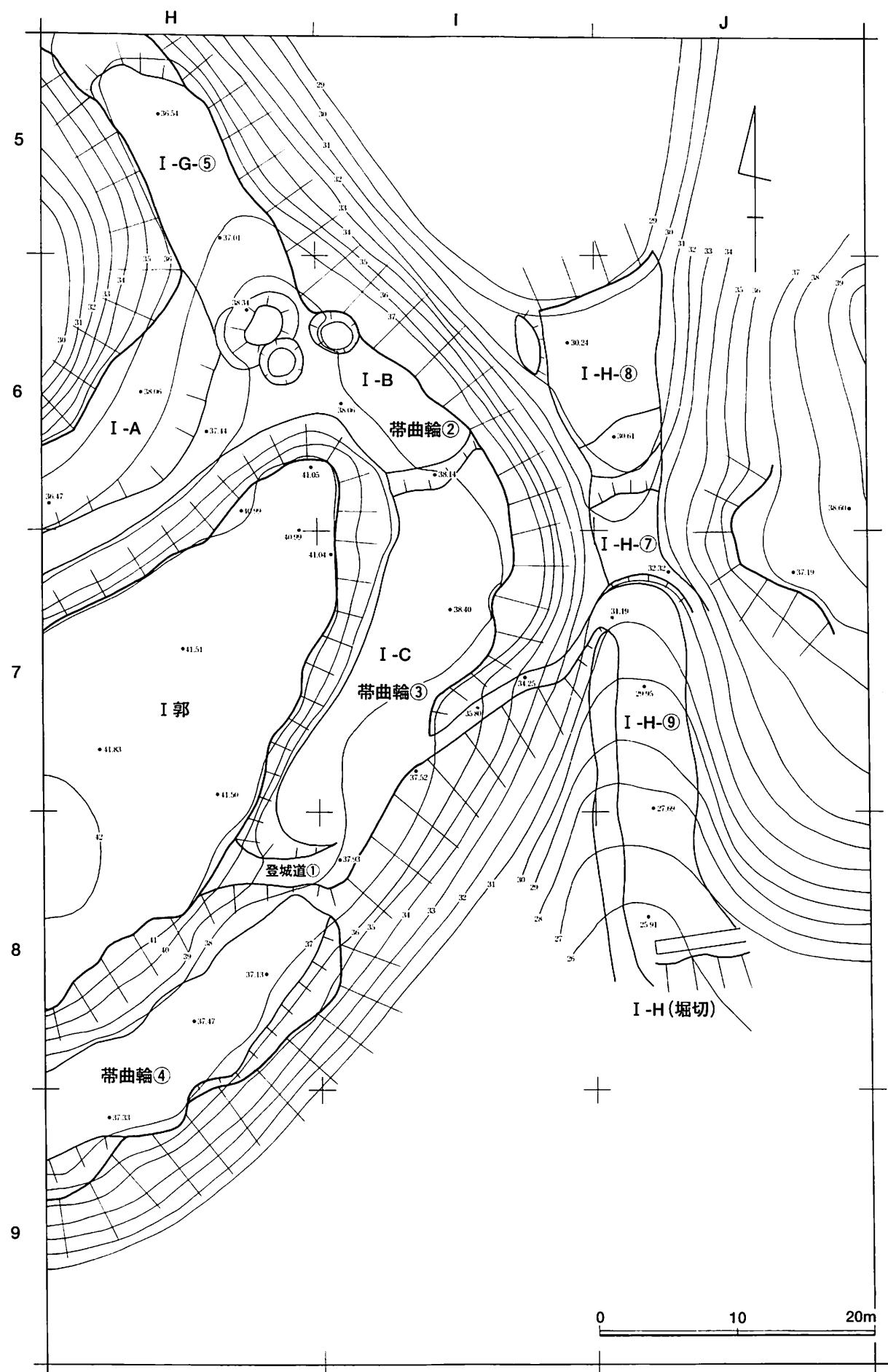
第25図 江田城跡測量図②



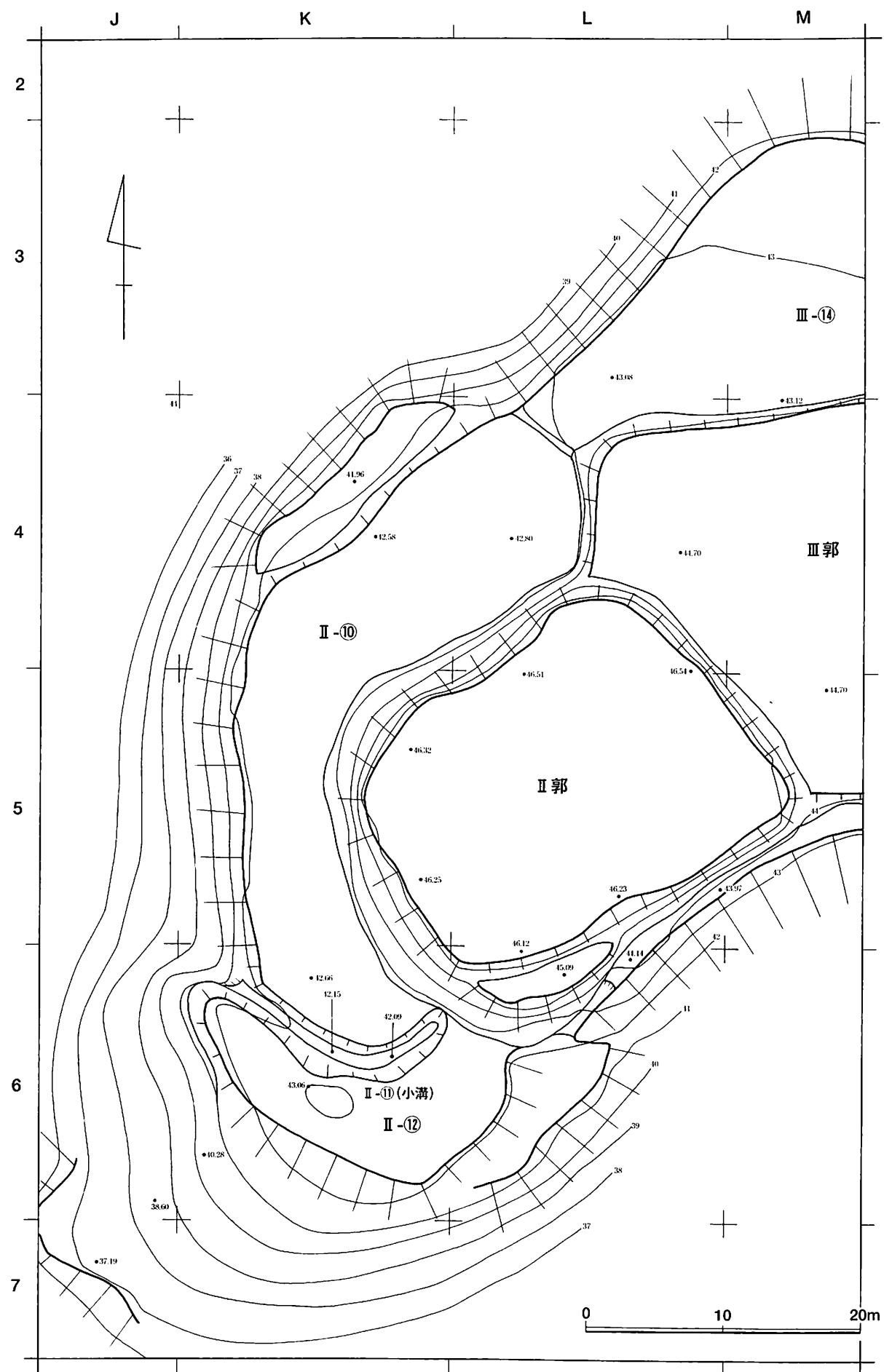
第26図 江田城跡測量図③



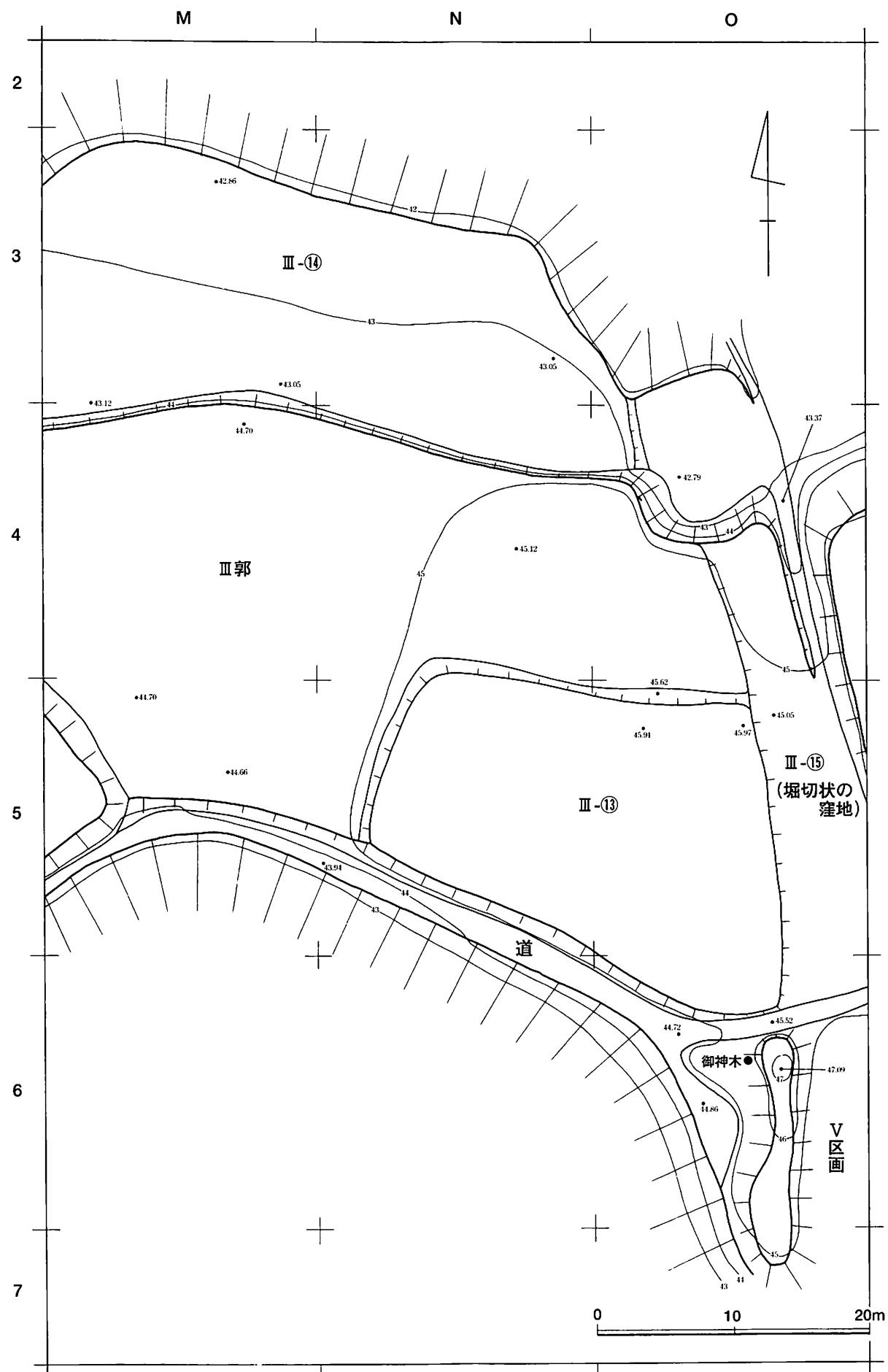
第27図 江田城跡測量図④

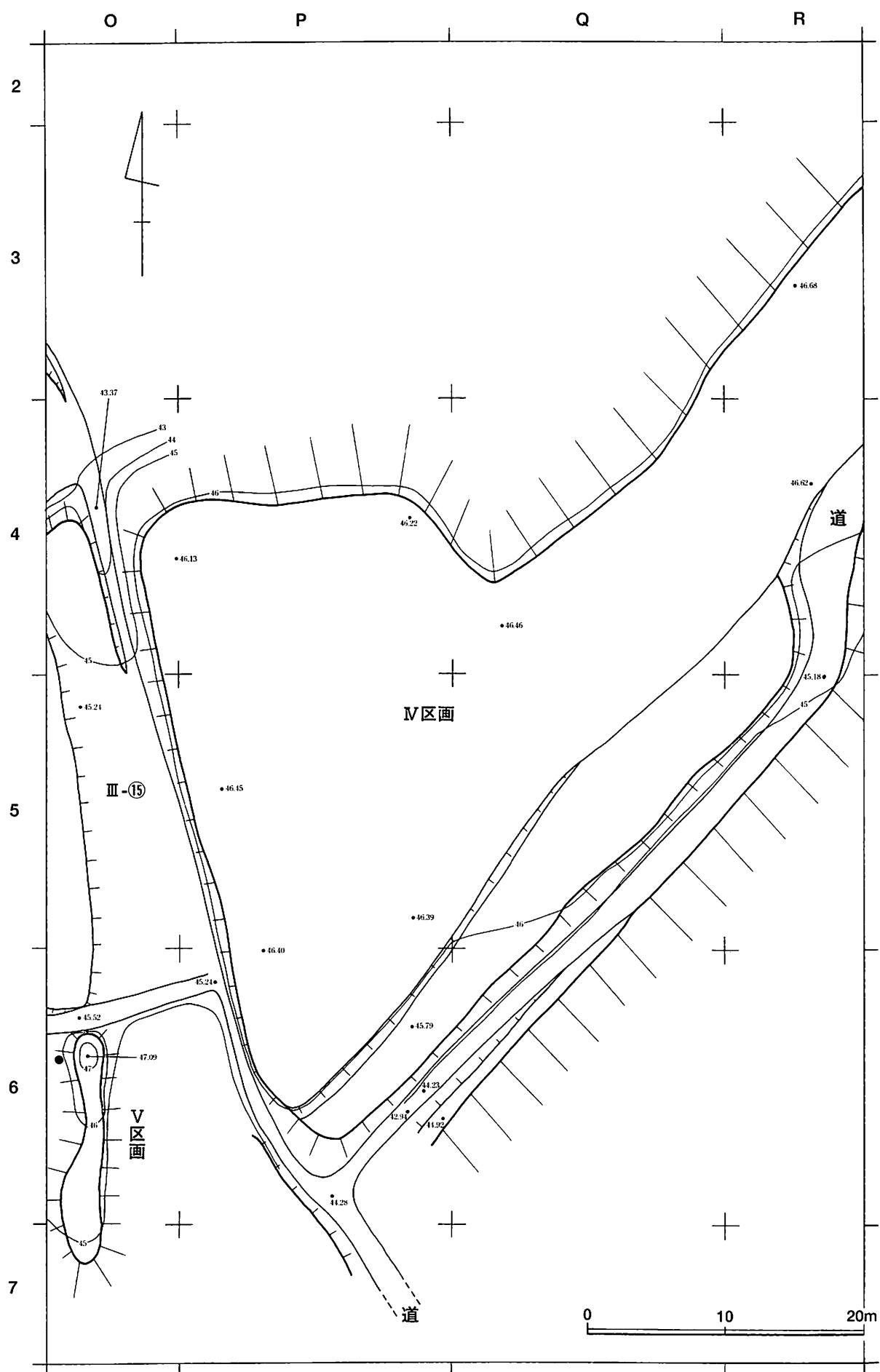


第28図 江田城跡測量図⑤

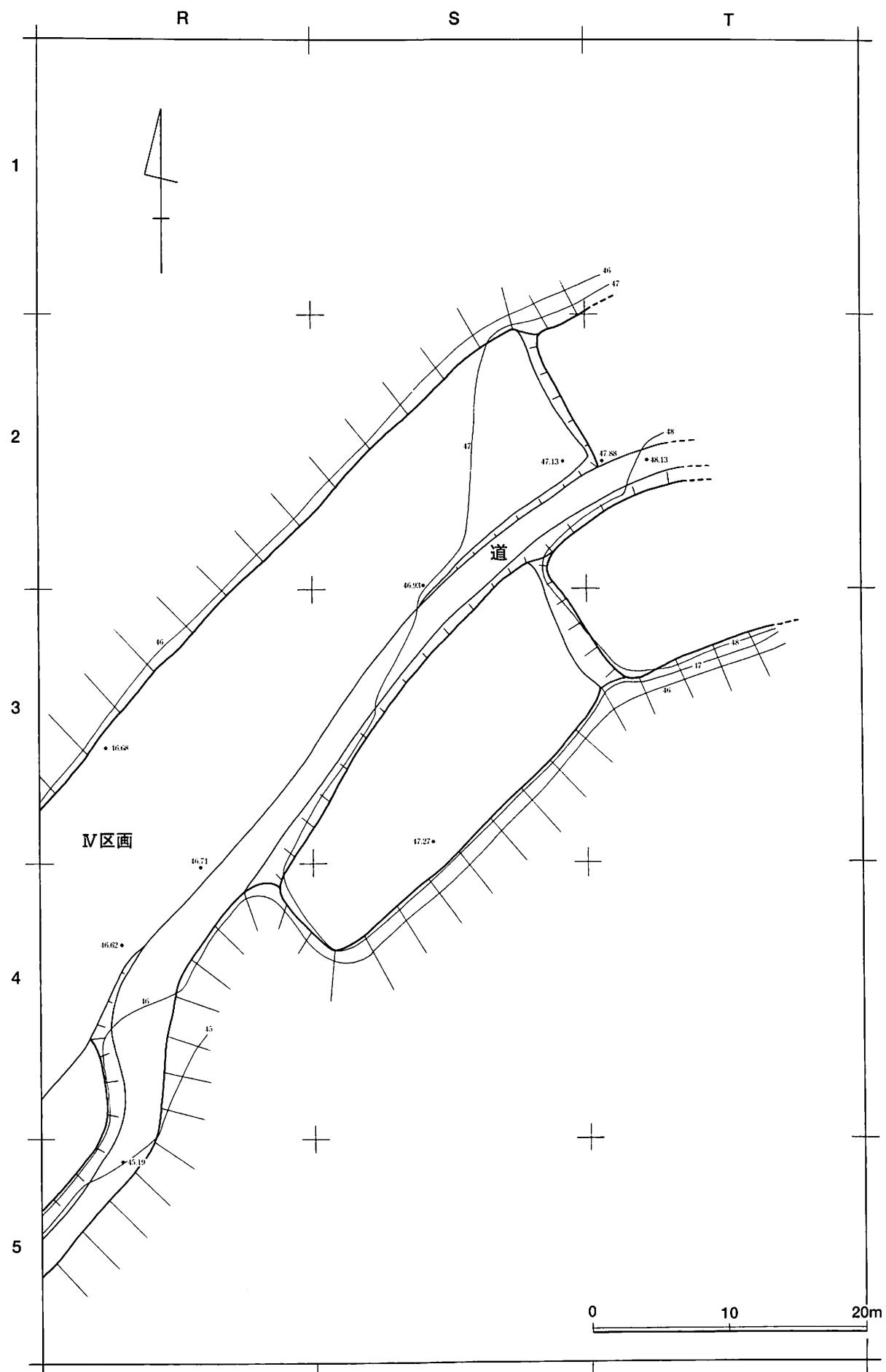


第29図 江田城跡測量図⑥





第31図 江田城跡測量図⑧



第32図 江田城跡測量図⑨

第Ⅲ章　まとめ

1. 乙城跡おと

①城跡は、麓集落の三宝寺地区から、離れた場所に位置しており、砦の類である。この点に関しては、集落に極めて隣接する江田城跡・焼米城跡・用木城跡・牧野城跡の町内城跡とは、明らかに性格が異なる（これらは、城郭と集落が一体化した総構えの城である。平時の際には、麓集落のセンター的な役割も果たしたと想像される）。この意味からすれば、極めて有事色が強く、普段は、物見の場で、有事の際の「逃げ込みの場」である。確かに、Ⅰ郭とⅡ郭の平場面積は、それに見合うだけの広さを有している。実際、領民まで城内に収容するには、相当の区域が必要である。乙城跡の場合、さらに数多くの小段や帯曲輪も、避難生活の居住区画として利用出来る。

②今日、城跡地は、南面の旧タオル工場近くから遠望しても、場所を明確に把握する事が出来ない。もちろん、丘陵地全体を覆う木立群が、視野を妨げている事もある。しかし、それを差し引いても大差無く、例え丘陵地が、むき出しの状態であっても、城地の一部（最高所）が、僅かに望めるだけであろう。麓の三宝寺地区から見ると、前面に横たわる江田城跡の本体丘陵ラインが、背面の乙城跡・丘陵ラインを、ほとんど覆い隠している事が分かる。今日、九州縦貫自動車道は、この両丘陵ライン間の谷部を走行している。

本城クラスの中世城跡は、麓集落から眺めた場合、すぐに、その場所が認識され、形の整った地形が多い事に気付く。これは、有事の際に限れば、押し寄せた敵方に城地を誇示し、威圧感を与えるためと解釈している。荒尾市的小岱山城跡や、南関町の大津山城跡では、麓から見える側に限って、石塁が積まれている。これらは「張り子の虎」的な魯の構築物である。一方で、インパクトの強い構築物や、端麗な容姿の城地（山や丘陵地）は、普段に領地のシンボルとして、権威の象徴にもなった。領民が、畏敬の念を抱く場所でもあった。この様に、城は、景観的にも強いステータスが求められたのである。したがって、その様な状況に無い乙城跡は、この点からも、実戦的な「物見の場や、逃げ込みの場」と見なされる。この様に、純軍事施設であったために、それらの事は、二の次であったと推定している（乙城跡の本城は、江田城跡と見なす）。

③乙城跡は、丘陵地に築かれた平山城で、丘頂域での広場確保に力が注がれ、崖面の削り落としが目立つ。斜面を大幅にカットした犬走りや小段も数多く残る。その一方で、本格的な堀切・空堀・土塁が観察されず、基本的には、調査済みの町内城跡（県道大牟田・植木線沿いの平山城跡群）と大差無い造りになっている。自然地形が卓越する繩張りである。この工法は、時期や地域的な特色を意味するのかも知れない。複合の防禦施設を有しないことで、乙城跡を含む町内城跡が、時期的に古いのではという考えに至る。「南北朝時代の城郭は、中世文書に城名を見ても、跡地の確定が困難である。例えそうでなくとも、遺構が観察されない山城がある」との調査結果がある（『熊本市史』「通史」中世編）。「早期の城郭は、地形の改転が一辺通りでは」との推論である。

④近隣地の小乙城跡と江田城跡の関連も興味深い。特に、小乙城跡については、前回の調査報告書で、小字名（乙城と小乙城）の類似点と、地形図上で位置関係から、本城と出城の関係に位置付けた。しかし、測量調査で、何度も現地に足を運んでいると、それぞれに、独立した城郭ではないかとの印象を持った。周辺地形の関係から、そうたやすく行き来が出来る状況に無いのである。両城を結ぶ古道も残っていない。麓集落も、小乙城跡は、寺山地区となり、乙城跡と異なる。両城跡は、先後関係にあるのかも知れない。このことについては、県道沿いの町内城跡群を、どの様に解釈するかに繋がる。

2. 江田城跡(註5)

①この城跡を考える時には、江田氏の存在が根底になる。『蒙古襲来絵詞』の「詞一」に登場する「ゑたの又太郎ひていゑ」が、それである。文永の役で、息の浜に集結した竹崎季長^{すえなが}が、互いに戦功をみつぐために兜を交換した「一門の人々あまたあるなか」の一人として知られる。

「えた」は江田で、名字の地は、菊水町の江田と見なされる。南北朝時代、相良定頼以下庶子等が、一色道獻(範氏)から配分された所領の中の「山田左衛門次郎分」に「一所 同國江田村田地武拾町江田太郎跡」とある。さらに、建久八年(1197)六月の薩摩国図帳写に、高城郡・東郷別府・祁答院に存在する得末名の名主として「肥前同住人江田太郎実秀」が見える。同年12月の薩摩国地頭御家人注文には、江田四郎の名が見える。さらに、文保元年(1317)十二月、島津道義(忠宗)が菊池庄領家の替えとして、宛給された所領の一つである肥前國福万名地頭職は「江田忍阿跡」であった。

以上の事実から、江田氏が肥後国江田を本拠とし、薩摩や肥前にも所領を有する、かなりの有力武士であったことは、まず確実としてよい。したがって、江田城跡を中心とする周辺の城跡群と江田城の関係が伺われる事になる。さらに、江田の地名については『佐佐木軍記附録』(莊園志料)に「玉名郡江田莊」とある。戦国時代の『上井覚兼日記』天正14年8月2日条に「従夫、江田と云處を通候 、武庫(島津義弘)様より御使僧被下候」とあり、柳川の立花宗茂を攻めて帰途中、上井覚兼は、江田の地で、島津義弘の使僧と会っている(古記録)。

②江田城跡の中心部分は、基本的に、中世城セオリー通りの縄張りになっている。東から西に延びる帯状丘陵地の先端部を利用したもので、丁度、この区域が小山状を呈し、東側に小鞍部が入るために、絶好の城地となった。前回の調査では、この小鞍部を城城の東限とする見方がなされたが、今回の測量調査で、Ⅱ郭とⅢ郭は、小鞍部(谷部)を跨いで丘陵本体部に拡大することも判明した。その中で、Ⅰ郭の造りが、用木城跡に酷似する事は、極めて、貴重である。中心部を四方から大幅に削り落として、高台風に仕上げ、裾部に、幅広の帶曲輪を巡らしている。全く同じ造りである所が、興味深い。同一城主によって築城され、それも、時期的な差異が余り無いと見るべきであろう。

しかし、乙城跡と同様に、縄張りの取り方に付い所がある。第一に、主郭から西側へ下る痩せ馬地形に堀切が見当らない。同じ事は、主郭の北東側と北西側の派生箇所にも言える。それは、丘陵本体部を断ち切る堀切にしても同様である。城域を確定するためには、是非とも必要な防禦施設であるが(江田城跡は、Ⅱ郭とⅢ郭が帯状地形の中にあり、これを断ち切る本格的な堀切が是非とも必要である)、見た目に、浅い掘り込みに終わっている。勿論、破城の時か、後世に埋め込まれた事も考えられるが、この区画北端の段差面を見る限り、深堀された本格的な堀切の埋没は、無いと見る。

以上の事からも、江田城跡でも、堀切の造営には、余り力が注がれていない事が分かる。この点が、大きな鍵である。先に述べた様に、江田氏との関連が推定される江田城跡及び、周辺城跡の特色的な城造りかも知れない。

③丘陵本体部の丘頂ラインを走る古道は、三宝寺地区からのもので、乙城跡～江田城跡を結んでいる。今日、乙城跡へは、九州縦貫自動車道の陸橋が架る。これは、道路建設によって古道が断ち切られた事による代替処置である。興味深いのは、この古道が、丘陵を登り切った三差路地点で、両城跡へ分岐する事である。特に、江田城跡は、これが撃手ルートとなり、三宝寺地区との関連が生じる。平時に江田城の裏道として、有事の際に、逃げ道になり得る事を意味している。丘陵地の南面域を見る限り「江光寺地区=江田城跡」「三宝寺地区=乙城跡」の城郭～麓集落の関係が成立するので、面白い事象となる。これにより、「江光寺地区=

江田城跡＝乙城跡＝三宝寺地区」の図式が成り立つ。町内城跡群を考える上で、大きなポイントになろう。先に述べた江田城跡と乙城跡のセット関係を、一歩、踏み込んだ推論になる。

④V区画の山の神も興味深い。三宝寺地区が、棕の大木を御神体として管理する一方で、I郭の「しろさん」と「弁財天」は、江光寺地区が管理してきた。一つの城に、二地区が、入り込む事になる。二箇所で、二地区が、それぞれの神を祀っているのである。これ又、江田城跡と乙城跡のセット関係を、さらに強める事象と言える。

【参考】近世の江田村について

慶長13年(1608)の検地帳では「田五一町二反六畝余・畠五三町一畝余・屋敷五〇筆五町四反三畝余、分米一千二六石一斗余、家数百戸、人数一千三八、牛馬三三、下ヶ名に江光寺口・天神免などがある。『肥後国誌』には「上江田村、長野村、清原村、津留村、皆行原村、牧野村、寺山村等ノ小村アリ」とある。天保5年(1834)の内田手鑑には、別に上江田村を載せており、江田村からの分村が知られる。明治9年(1876)に、江田村と上江田村は合併して江田村となった。明治11年頃の江田村は、戸数二七九、人数一千三八二、牛馬一六〇、日本型船一五、水車一があった。

【註】 7頁 (註1)『永里城跡Ⅰ』 上村文化財調査報告 第1集 2001年

(註2)『焼米城跡・萩原城跡・用木城跡』 菊水町文化財調査報告 第14集 1999年

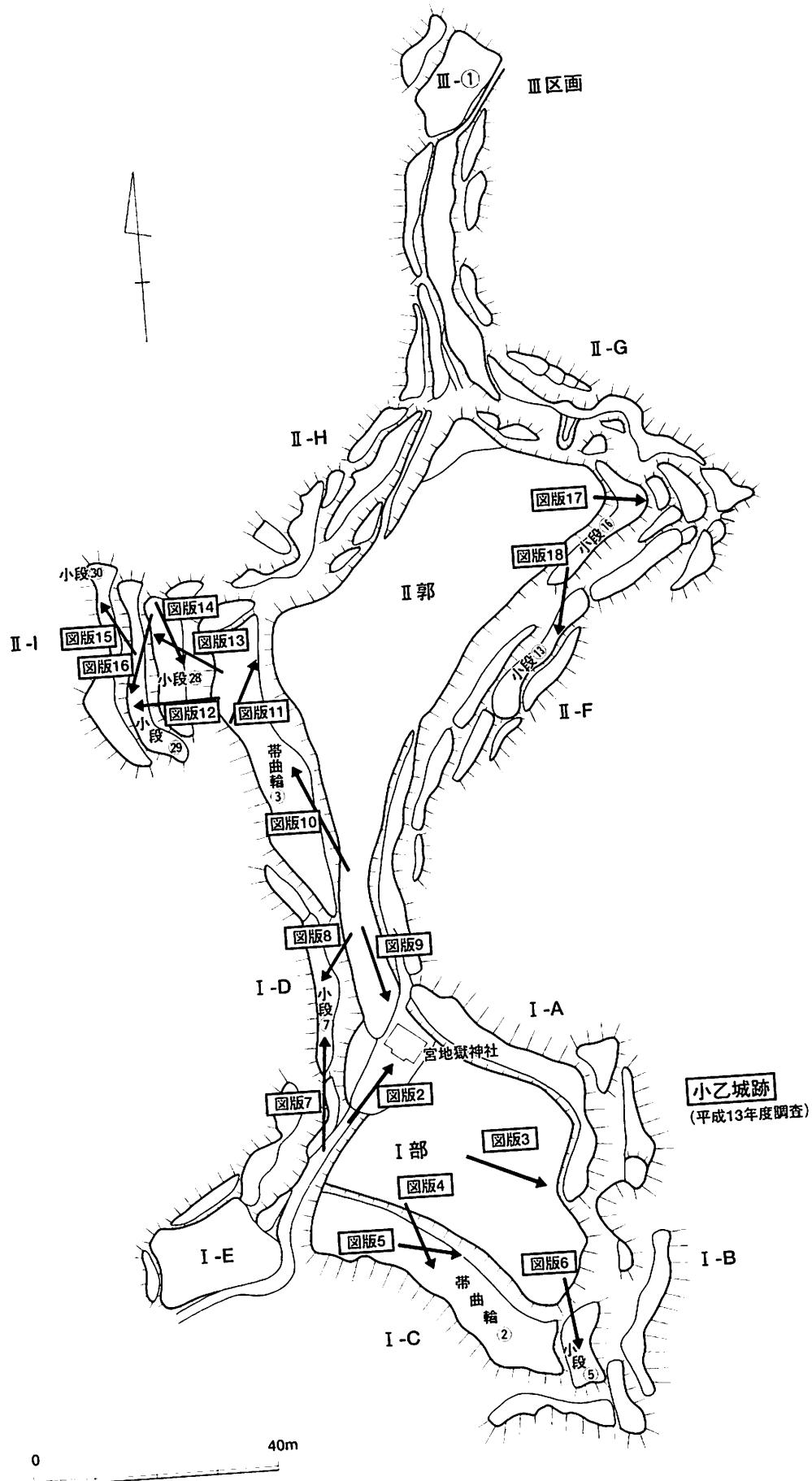
8頁 (註3)『堅志田城跡Ⅹ』 中央町文化財調査報告 第10集 2002年

(註4)『棚底城跡』調査概報 倉岳町企画課町史編纂室 2003年

41頁 (註5)『焼米城跡・萩原城跡・用木城跡』 菊水町文化財調査報告 第14集 1999年

『角川日本地名大辞典 43 熊本県』 角川書店 1987年

写 真 図 版



乙城跡 写真撮影位置図



図版1 乙城跡の遠望



図版2 宮地嶽神社(正面鳥居から)



図版3 I郭(南東区画)



図版4 I 郭 ⇒ 帯曲輪②



図版5 帯曲輪② ⇒ I 郭南側法面



図版6 I 郭南東隅 ⇒ 小段⑤



図版7 I 郭西下の坂道 ⇒ 小段⑦



図版8 括れ部 ⇒ 小段⑦



図版9 括れ部 ⇒ 宮地嶽神社



図版10 括れ部 ⇒ 帯曲輪③



図版11 帯曲輪③ ⇒ II 郭北西側法面



図版12 帯曲輪③ ⇒ 小段②



図版13 帯曲輪③ ⇒ 小段②



図版14 小段② ⇒ 帯曲輪③北西側法面



図版15 小段② ⇒ 小段③



図版16 小段②₈ ⇒ 小段②₉

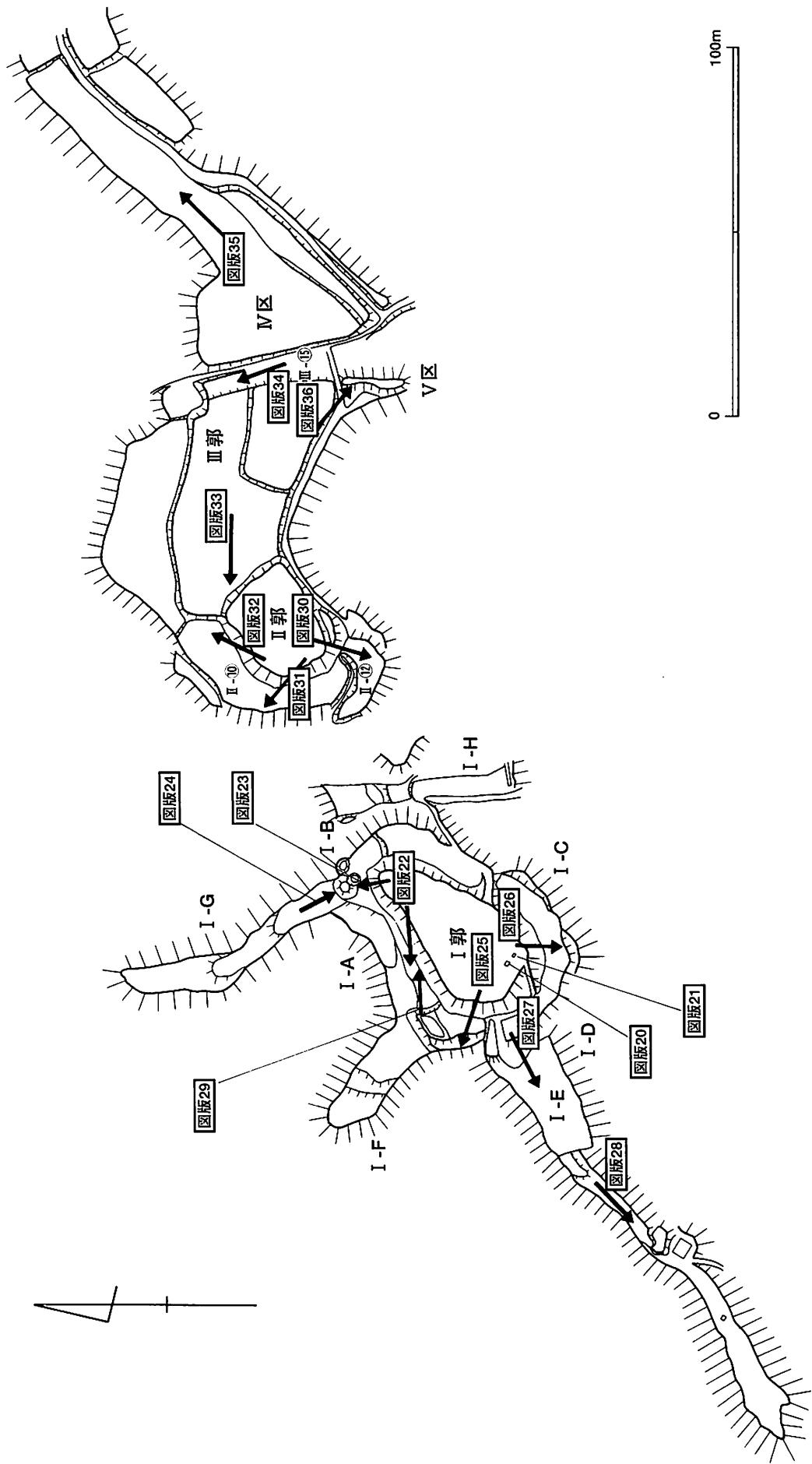


図版17 Ⅱ郭北東隅 ⇒ 小段⑯



図版18 小段⑯ ⇒ 小段⑬

江田城跡 写真撮影位置図





図版19 江田城跡の全景



図版20 I郭に祀る祠[しろさん]



図版21 I郭に祀る祠[弁財天]



図版22 I 郭東端 ⇒ 帯曲輪①



図版23 I 郭東端 ⇒ I-G
(北方向・派生ライン付け根)



図版24 I-G ⇒ 北方向・派生ラインから I 郭の北東側法面



図版25 I 郭西端 ⇒ I-F-④
(北西方向・派生ライン付け根)



図版26 I 郭南端 ⇒ 帯曲輪④



図版27 帯曲輪⑤ ⇒ I-E-②
(南西側丘頂ライン付け根)



図版28 I-E-③ ⇒ 南西側丘頂ライン
(瘦せ馬地形)



図版29 帯曲輪① ⇒ I 郭北側法面



図版30 II郭南西側 ⇒ II-⑫
(帶曲輪)



図版31 II 郭西縁 ⇒ II-10
(西側帶曲輪)



図版32 II 郭西隅 ⇒ II-10
(北側帶曲輪)



図版33 III 郭 ⇒ II 郭東側法面



図版34 III-⑯(帶状の窪地)



図版35 IV区画



図版36 V区画(御神木)

報 告 書 抄 錄

書 名	乙城跡・江田城跡
シ リ ー ズ 名	菊水町文化財調査報告第16集
編 著 者 名	大田幸博 益永浩仁
編 集 機 関	菊水町教育委員会
所 在 地	熊本県玉名郡菊水町江田3886
発 行 年 月 日	2003年3月31日

所収遺跡名	所 在 地	調 査 期 間	調査原因
乙城跡	熊本県玉名郡菊水町大字江田字乙城	平成14年4月 ～平成15年3月	学術調査
江田城跡	〃 字江光寺・白岸		〃

遺 跡 名	主 な 遺 構
乙城跡	半山城。 I郭平場・II郭平場・崖面の削り落とし・小段群・帯曲輪
江田城跡	半山城。 I～III郭の平場・小段・幅広の帯曲輪

菊水町文化財調査報告 第16集

乙城跡・江田城跡

平成15年3月31日

〔編集発行〕
菊水町教育委員会
〒865-0316 熊本県玉名郡菊水町江田3886
☎(0968)86-3132

〔印刷〕
(株)大和印刷所
〒862-0931 熊本県熊本市戸島町920-11
☎(096)380-0303

この電子書籍は、菊水町教育委員会が発行した『菊水町文化財調査報告 第 16 集 乙城跡・江田城跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

菊水町と三加和町は、西暦 2006 年に合併して和水町となりました。調査記録及び出土遺物は、和水町教育委員会が保管しています。

書名：菊水町文化財調査報告 第 16 集 乙城跡・江田城跡

菊水町所在の中世城跡

発行：和水町教育委員会

〒861-0913 熊本県玉名郡和水町板楠 76 番地

TEL 0968-34-3047

電子書籍製作日：2024 年 2 月 28 日